
オタク系推理少女 為永春水II フィギュアはなぜ殺される

中び連会長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタク系推理少女 為永春水II フィギュアはなぜ殺される

【Nコード】

N0655I

【作者名】

中び連会長

【あらすじ】

シリーズ第二弾。オタクホームズ、為永春水×ツンデレワトソン、御子柴麻琴の百合ツプル(?)が今度は不気味な見立て殺《人形》事件に挑む。二人が通う私立経倫館高校でアニメのフィギュアが木に首を吊るされるといふ、理事長の一族にまつわる伝承をなぞらえた事件が発生。当初は単なる悪戯と思われたが、その翌日……相変わらずオタネタ満載のライト感覚本格ミステリ。今回は高木彬光&横溝正史テイストでお送りします。(前作《フランス人の手紙の冒険》から順に読むことを推奨します)

【問題編1】オタクには売れるものがある（前書き）

＊＊

*** 主要登場人物 *

【御子柴麻琴】（CV井上麻里奈）

ワトソン役で重篤なビブリアマニア。私立経倫館高校二年生。

【為永春水】（CV松岡由貴）

ホームズ役で濃いオタク。麻琴の幼なじみにして同級生。

【綾瀬遊】（CV沢城みゆき）

麻琴らの同級生で元中の友人。陸上部のエース。

【御子柴耀一】（CV杉田智和）

県警本部警備部公安課に勤務する、麻琴の兄。

【鈴木修太】（CV鈴木健一）

陸上部員で遊の恋人。

【鯉沼清明】（CV穂積隆信）

学校法人経倫館理事長。御子柴家とは遠縁。

【大宝寺誠彦】（CV中村正）

囑託の生物教師。理事長とははこの関係。

【浦真奈美】（CV生天目仁美）

司書教諭。

【熊谷洋雄】くまがい ひろお（CV間島淳司）
住み込みの用務員。

【秋川茉莉花】あきがわ まりか（CV喜多村英梨）
派手な容姿の麻琴らの同級生。

【林健三】はやげんぞう（CV宝亀克寿）
地回りのヤクザ。

【問題編1】オタクには売れるものがある

大阪のイベント会場への道は容易ではない、ましてや百冊もの同人誌を抱えてとなればなおさらだ。

まず始発で地元のJR白陽駅はくようから県庁所在地へ、そして新幹線のぞみに乗って小一時間揺られた末に新大阪に到着すると、在来線を二本乗り継いで大阪環状線の福島駅まで。そこから十分くらい歩いてようやくと目的地なのだが、

「限界っ」

改札口を出たところで、荷物の重みに耐えかねた私の身体はそこかしこで悲鳴を上げていた。

「もう一步も動けないから」

ゴツイキャリーバッグを脇に放り、一人で座り込み抗議を開始する。足に根が生えるという比喻表現があるが、今の私はまさしくこの状態。誰が最初に言いだしたか知らないが、そいつは間違いなく天才である。

「春水はるみ、こんなに刷ってマジで一冊残らず完売するんでしょうね」

私は肩で息をしながら、人一倍朝に弱い自分をこんな時間に大阪まで連れ出した友人をキツと睨にらみ上げる。

「帰りもこんなのはごめんだから、もし売れ残ったら本は全部堂島どうじま川に放り込むわよ」

「……マコちゃんそれ環境汚染」

「ふん、今は環境問題より私の肉体問題よ」

「朝っぱらからアダルトな表現やな……いや、大丈夫大丈夫。ずえ〜つたい開場一時間で綺麗さっぱり完売するって。ウチが百パー保証する！」

いや、売り手が保証しても意味ないんですけど。

「疲れた、もうゴールしてもいいよね……」

ふと辺りを見渡すと、駅を足早に行き交う人々が一様にこちらの足元にチラチラと視線を送っている。その時初めて、天下の往来で絶対領域を盛大に晒け出しているのに気付いた私は、露出狂の趣味はないので慌ててシヨートパンツのお尻を払って立ち上がる。

「ナイス絶対領域」

「やかましい」

さてはこいつ、私が気付くまでわざと黙ってたな。まあいい、パンツじゃないから恥ずかしくないもんつ。

「ワンメーターだろうけどタクシー使いましょ。私が全額出してもいいから」

一応ブルジョア階級の家に生まれているが、私の金銭感覚は庶民そのものなので、タクシーなどという贅沢な移動手段はいつもなら自重するところだが、この際背に腹は変えられない。今年末にはイベント会場の近くに私鉄の地下駅が開通するらしいから、交通の便は飛躍的によくなるだろうが。

「そんな、こつちが売り子をお願いしとる立場やからウチが出すよ」「いいわよ、私も嫌いで来てる訳じゃないんだから」

結局二人で折半ということに落ち着き、ロータリーのタクシー乗り場まで行くと、既に同じ匂いのする先客たちが順番待ちの列を作っていた。

三台見送った後に来た車に乗り込み、胡麻塩頭が三分の一ほど禿げ上がった運転手さんに「国際会議場までお願いします」と告げる。それにしても、大阪は都会の割には初乗り料金が地元とあまり変わらないくらい安いなあ。去年の夏、春水と初めて有明ありあけに参拝した時は初乗りの高価たかさにでっかい驚いたもんだけど。

「今日はお嬢さんみたいなお客さんよう乗せるけど、あそこで何かやるん？」

信号待ちの間、後部座席を振り返った運転手さんが不思議そうに訊いてきたので、私がどう答えようか思案に暮れていると、

「第三次世界大戦です」

簡潔にそう述べた春水は、逆に運転手さんに尋ねた。

「ところでおじさんは今年定年退職されたんですか」

「えっ……う、うん」

バックミラーに映ったその顔は戸惑いに満ちていた。ややあつて目的地に着き、私たちを吐き出したタクシーは妖怪のサトリを見るような運転手さんの表情の残像を置き土産に走り去った。

「あなたの悪い癖よ」

私は一応たしなめる。

国際会議場で同人即売会がよく開催されるのは、仕事に慣れた運転手さんなら周知の事実だから、客が返答に困るようなことをわざわざ訊くはずもない。つまり、あの人はタクシードライバーの仕事を始めてまだ間もないことになる。そして、六十前後の歳格好と五月という時期を併せて考えると さっきの推理のタネ明かしはこんな具合だろう。少し考えれば私だつて判る。が、この理屈が一瞬で閃くのはやはり常人の業ではない。

「ごめん、マコちゃんが困つとつたからおっちゃんも困らせたれ思つて」

「そんなんで意趣返しする必要ないわよ」

私は肩をすくめ、ずんぐりした長方形の巨大な積み木を縦にした形状の、まさにグランキューブという愛称がふさわしい銀色の現代的建築物を仰ぎ見る。

何度となく足を運び、既に見慣れた光景。

かくして私 御子柴麻琴、そして為永春水の両名は、本日の戦

場に臨んだのだった。

会場周辺の雰囲気先ほどの春水の言に倣つて第二次世界大戦で

形容するなら、さしずめノルマンディー上陸前夜といったところだろう。二、三十代の男性が大半を占める行列自体はマナーを遵守して整然と並んではいるのだが、何が何でも目当てのグッズを手に入れてやる　という、ある種殺気じみたオーラが立ち上っていた。臨戦体制である。

「お〜お〜、殺伐としてるねえ」

横目で見やり、私は素直な感想を漏らす。

「今回は大手のサークルも結構参加しとるから、始発組多いんやないかな」

なるほど、列の先頭集団にはディレクターチエア持参の人もちらほら見受けられた。私たちも前回のイベントでは県庁所在地のカラオケボックスで夜を明かした後、朝の七時前に現地入りして《能登麻美子出演作古今東西》で待ち時間の大半を潰した思い出がある。

「あの時はヒートアップし過ぎて脳みそが焼き切れる思ったで……まっ、今回のウチらには全然関係ない話やけどな」

春水はニヒヒと下卑た笑い方をして、

「テケテケン、サークルチケットお〜っ、ほわ〜んほわ〜んほわ〜ん」

と、自分の白いエナメルの小さなリュックから首かけストラップが付いた《出展サークル専用通行証》を二つ取り出して、一方を私に渡した。準備会から事前に出展者に郵送されるもので、これを一般参加者の出入口のすぐ横に設けられた出展者専用出入口でスタッフさんに提示すれば、長蛇の列を尻目に悠々と会場に入れるのだ。

「有明の最終日ほどやないけど、ずら〜と並んどる人たちにとってはプラチナチケットやるな」

「実際手にしてみるといい気分ね」

スタッフさんにナチュラルな笑顔で挨拶してビルの中に入る。始発電車に来て長時間律儀に並んでる人たちにはちよつち悪いかなと思ってしまう　と言いたいところだが、正直な心境は優越感でいっぱいだった。諸子百家の荀子じゆんしではないが、人間の性ってやっぱり

《悪》なんだなと改めて実感する。まあ、会場入りしたら諸々の準備があるんだけどね。

新しいビルに特有のツンとした匂いを嗅ぎながらエレベーターで会場の十階会議室まで昇り、受付の側に設けられた準備会事務局スペースに顔を出す。とは言い条、私は春水の後ろで木偶人形でくよろしく控えているだけだが。

「どうも、いつもお世話になつとるスプリングです」

春水がぺこりと頭を下げてツインテールの髪を垂らしつつフランクな感じで声を掛けると、それまで五、六人で打ち合わせをしていたスタッフさんたちがこちらに挨拶してくる。春水の方は以前からネット上で面識があるのか打ち解けた様子だが、私にとっては全くの赤の他人なので、心の裡うちで若干の疎外感を味わいながらぎこちなく目礼した。

ちなみに《スプリング》というのは、春水が一番よく使うハンドルネームだ。彼女にしては極めてまともなネーミングである。

「アストロンさん、今回は行列に大人袋配らなあかんくらい満員御礼やないですか、ウチえらいびつくりしました」

と、春水は人だかりの中心らしい柔和な雰囲気きの片太りの男性に話しかける。

「ええ、今回パンフの表紙に絵師の先生からイラストを頂きましたからね。その効果もあるんじゃないかと思えますよ」

準備会代表冥利みょうりに尽きます。アストロン氏は目を細めたが、すぐ険しい顔になった。

「ただ今回明らかに会場のキャパを越えてるんで、不本意ですけどスタート直後は入場制限しなくちゃならんかな、と今打ち合わせてるところなんですわ」

「ほなら次回からはお引越してことですか」

「そうなりますかね。手頃な会場が見つかるといいんですが……」

「あ、これ見本誌です」

春水は今日販売する同人誌を一冊アストロン氏に差し出した。

各々の即売会によって任意だったり強制だったりまちまちだが、出展者は準備会に見本誌というものを提出する。準備会サイドで資料として保管したり、読書会というイベントを開くのに使ったりするのだ。事前に提出が義務付けられている場合、準備会が内容を確認してサークルチケット入手のみを目的として出展する不屈きな連中

俗に言うダミーサークルを排除するためだったりもするが。ちなみにこの即売会は任意提出という形である。

「どうも、後で個人的にも読ませてもらいますよ」

顔を少し赤らめた《万条の仕手》が限界までメイド服をはだけて女豹ポーズを決めている表紙を見つめて、アストロン氏はにんまり笑っていたが、遠くから別のスタッフが何か問題でも起きたのか困惑したような顔でこちらに駆け寄ってきた時には、素早く仕事の顔に戻っていた。ちよつとカッコいい。

「ほな、また落ち着いたら顔出しますんで」

それを潮に春水と私は事務局を辞して自分たちの出展スペースに向かった。

両隣に挨拶してスペース内に入り、荷物を下ろす。

「ウチ売場のセッティングしとるから、マコちゃんは先着替えてきて」

「うん了解」

私はメイン会場のすぐ隣に設けられたコスプレイヤー用の更衣室に向かい、春水手縫いの衣装に着替えた。

姿見の中、少し照れた表情をした非情のメイドさんがいる。

……うん、やはり髪型がロングストレートなのは不自然であります。が、この髪は私が内心密かに売り物に出来ると考えている数少ないパーツの一つなので、コスプレのためにバツサリという訳にはいかない。

（これで女豹ポーズしたらさっきのアストロンさんは大興奮かしら……）

ふと脳裏に下らない考えが浮かんだ。

いや、三次元には一切興味が無いほどの悟りの境地に達していて、こんな私を見ても無反応だろうか。それはちと哀しい　　って、何考えてるんだ私。

「……バツカみたい」

頭をシエイクして下らない思考を追い払い、部屋の壁に掛かった丸時計に視線をやる。開場まで、後一時間半だった。

開場と同時に一般参加者が殺気を伴ってどつとなだれ込み、祭が始まった。どうせ猫も杓子も大手に殺到して私たちのブースには無縁だろうな、そう思っていたのだが　　。

そして三十分後、信じられないことに私は最後のお客さんを見送っていた。

次に待っていた痩せぎすの大学生くらいの男性に「済みませんが完売です」と頭を下げると、それまで刻々と低くなっていく同人誌の山を期待と不安がない交ぜになった眼差しで見守っていた彼の顔が、まるで死刑宣告でも受けたかのように絶望一色に彩られた。

彼の後ろにずらっと並んでいる人たちも同様の御面相だ。いや、私にそんな眼で訴えられなくても。

何とかしろ。隣の、こちらは《炎髪灼眼の討ち手》のコスチュームに身を包んでいる春水にアイコンタクトを送ると、椅子からすくと立ち上がった彼女は両手でメガホンを作って、

「本日《絶対領域商会》に並んでくれた人、ホンマにありがとうございます。ごいまゝです。ごめんやけど、本は只今を持ちまして完売しました。

現在、増刷してネットオク上での販売を検討中ですんで正式に決まりましたら、改めて報告します」

よく通る声で叫ぶと、行列の間からああともおおとも付かないトーンの低い納得の聲が上がり、それぞれ別の獲物を求めて散らばっていった。

「どくや、ウチの人徳」

春水はこちらを振り返ってふんと小鼻を膨らませる。

「ホント残念、あんたの本を川に投げ込めなくて」

「またまたく、マコちゃんたらそないなツンデレ発言しよって」

「だから私をツンデレと呼ぶなと何回言えば……この際だからはっきり言っとくけど、私に一切デレはないから」

「ああつ、そのワラジムシでも見るような見下した表情最高や。もつと、もつとウチを罵ってくなっ！」

「死ねばいいのに」

ド変態をその場に放置して立ち上がる。

「どこ行くん？」

「あんたと違って私はもう手が空いちやったから撮影スペースでも行こうかなと思って。ま、せっかくコスしてるから記念にね」

「マコちゃん、口では嫌や嫌や言うつつたのにやっぱノリノリやん。まさしくツンデレの鏡」

「あゝ、うるさいうるさいうるさい。」

やる気のない棒読みでそう言い捨てて私はその場を後にした。

数十歩歩いてからふと振り返ると、早速数人の男性が春水のスペースを囲んでいる。多分、今日の買い物をあらかた済ませた春水のサイトの常連さんが挨拶に来たのだろう。彼らは春水の艶姿あでに魅了されているようだった。

……若干の苛立ちが陽炎のように揺らめいているのを私は自覚した。

念のため言っておくが、断じて独占欲メラメラ的嫉妬とかではない。多分、これは自分自身に対する苛立ちに違いなかった。私以外にも多くの人と豊かな人間関係を構築し、大空を自由に舞う鳥のように自分の世界を謳歌おっかしている春水と、御子柴という家名から生

じるしがらみに煩わされている私の身とを引き比べての。

先日、両親の法事の打ち合わせでやむをえず兄と一緒に本家で親族と同席したのだが、あのハイエナ連中は相変わらずの態度だった。御子柴家の顧問弁護士を親の代から務めている小笠原おがさわらさんが座を取り持つてくれてなければ、話し合いの途中で連中の顔にお茶をぶっかけて席を蹴っていたかも知れない。法事の時にはまた連中と顔を突き合わせなければならぬと思うと、今から胃が痛くなってしまう。

……あゝやめやめ、こんな格好でナーバスになっても仕方ないじゃないか私。

深呼吸を一つして気を取り直し、撮影スペースに足を踏み入れると早速数人に声を掛けられた。

「済いません、ちよつと写させてもらつてよろしいですか」

「はい、目線下さ〜い」

「どうもありがとうございました〜」

カメラ小僧、という言い方は語弊があるだろうが一眼レフ持ちの《いかにも》な雰囲気を漂わせ、声かけも完全に口慣れた営業口調である。かえつてこっちの方が戸惑つてしまい、表情筋も終始強張りこわばりがちだったが、

「いい表情スね〜、まるで本物みたいだ」
褒められた、のかな？

かくして私の姿は数十人のファインダーやらフォルダやらに収まり、私も五、六人のレイヤーさんの可愛い姿を写メに収めた。

そして、会場の熱気で喉が渴いたので自分のスペースに置いてきたペットのお茶を飲みに戻ろうとした時、

「先ほどは」

それまで撮影スペースの隅の方で壁に背を預けていたアストロン氏が、遠慮がちに声を掛けてきた。

「あ、は、はいどうもっ」

渴きのせいで声がかすれてしまい我ながら無様な挨拶だったが、

アストロン氏は柔和な表情を一ミクロンも崩さなかった。恐らく気に留めないふりをしてきているのだろう、ありがたいやら恥ずかしいやら。

「僕も一枚いいですか？」

氏がそれまでだらりと手にぶら下げていたデジカメラを示して尋ねてきたので、

「もちろんっ」

私は頬を司る筋肉に総動員をかけ、最大限可愛らしく見える笑顔で応じた。胸が妙に熱い。

「じゃあお言葉に甘えて撮らせてもらいますね」

氏が目を糸のように細めたその時、なぜ私は初対面のアストロン氏をさつきから気に掛けているのか、その理由がやっと判った。

知性を湛えた一重の細い目、穏やかでいて頼りがいのある雰囲気、紳士的で柔和な口調。それらを在りし日の父の面影に二重映しにしていたのだ。

「スプリングさんがブログに書いてましたけど、その衣装手縫いなんですよね。いや、よく出来てます」

カメラを構えてフラッシュを焚きながら、氏が心から感心した風に言う。

「はあ、私はこんなの着るつもり全然なかったんですけど……何とというか彼女に唆そそのかされまして」

私はぼやかした説明でお茶を濁した。当初は断固拒否する構えだったが、先々週起きた親友が巻き込まれたストーカー事件を春水が解決したこともあつて無下に断れきれなくなったのだ。

「よくお似合いですよ」

「そんな……私なんて他のレイヤーさんたちに比べて全然中途半端です、髪の毛なんか長いままですし」

「いや、でもそんな素敵なロングストレートを落とすのはもったいないですよ」

「えっ」

思わず声が一オクターブ上がってしまった。

「その黒髪にはスプリングさんみたく炎髪灼眼のコスプレも映えそうですね、次回は是非それで」

「か、考えときます」

視線を落として言葉少なに感じながらも、私の心の中ではたくさんの思考が雑踏の賑わいのように忙しなく交錯していた。

押し黙ったまま、私が先方の言葉の意味を量りかねていると、

「よかったら今撮った写真送りますようか。差し支えなければアドレスを教えてください」

氏は更に意味を量りかねる一言を口にした。

いや、正直言つと《意味を量りかねる》は韜晦に過ぎない。いくら恋愛経験の浅い私だって、これがいわゆるナンパの常套手段である可能性に思い至らないほどウブではない。

アニメや漫画などでは定番の、突然の出逢い　私はどつちかというところという筋立てを「そんなこと実際ある訳ないじゃん」と鼻で笑ってきたタチなのだが、もしかしたら今日この瞬間からそのひねた考え方も修正されるかも知れない。

私がどう反応しようか考えあぐねていると、アストロン氏の顔に暗い陰が差した。

「迷惑でしたか」

まさか私が嫌がっていると勘違いしてるっ？

「とんでもないですっ」

ぶんぶんつと首を大仰に横に振って全身全霊で先方の誤解を解いた私が、

「あ、はい。私のアドレスはですねっ」

わざとらしいくらい明るい声音で自分のアドレスを告げようとしたその時、

「　　あら、ここにいた」

水色の提灯袖のブラウスを着た三十前後の女の人が親しげな様子でこちらに近付いてきた。長い黒髪を胸の辺りまで伸ばしているの

が印象的だった。

女の人は五、六歳くらいのお下げを赤いシュシュで結わいた女の子の手を引いている。そのおチビちゃんはこの場に似つかわしくないプリティでキュアキュアな五人の戦士たちがプリントされた白いトレーナーを着ていた。

「何だ、結局み〜ちゃんも連れてきちゃったのか」
アストロン氏が言った。

「うん、最初はお義母さんに預けてくつもりだったんだけど、どうしてもパパに会いたいって言うから」

女の人が笑顔でみ〜ちゃんの手を放すと、

「ぱあぽ〜」

おチビちゃんはお下げを揺らしながらアストロン氏の方に駆け寄り、その足元にギョツとしがみ付いた。

「そうか、そんなにパパが恋しかったか〜」

アストロン氏はみ〜ちゃんを抱き上げて頬擦りした。

……

……

…

マジですか？

「あ、妻と娘です」

そしてトドメの一言。

私は先刻より大幅にトーンダウンした声でアドレスを告げると、早々にその場を立ち去ったのだった。

【問題編2】蕩児たちの帰宅

即売会は四時に終了した。

撤収作業を済ませて会場を後にした私たちは、もはや再び福島駅まで歩いて戻る気力がなかった。隣接するリーガロイヤルホテルから出てきたタクシーを拾って新大阪駅まで行き、構内の売店で兄貴に頼まれていた栗おこしをいくつか買って、下りの《のぞみ》に乗った。

「あゝあ、残念」

軽くリクライニングを倒しながら春水がぼやいた。その足元には各所でゲットした戦利品で膨れ上がった紺色のトートバッグが、水揚げされたフグのように転がっている。往路で自分の荷物を入れていたキャリーバッグにはもはや入らないらしい。あれの中身は完売したはずだが……。どんだけ買ってんだよ、おい。

「今日が土曜やったらもう一泊して日本橋ホンバシでも巡るんやけどな。後はなんばグラント花月とか」

「山出しのツアーの観光客じゃあるまいし、そんなの嫌よ。天満てんまの繁盛亭かみがたで上方落語聴いてる方がいいわ」

四方を山に囲まれた掛け値なしの田舎在住の私が言うのもナンだが。

「……マコちゃんいちいちマニアック過ぎやで」

ほっとけ。

落語を聴くのは父譲りの趣味だ。我が家の書齋には父が生前蒐集した音源やら書籍やらが結構あって、最近の若い女の子がキャアキヤア言うような一発ネタやキャラ頼りの若手芸人なんかよりよほど面白い。って、私も若い女の子ですけどね充分。

「こないだ学校で、昼休みに秋川あきがわさんたちのグループとお笑いの話になったやん」

秋川さんというのは私たちのクラスメイトで、派手な子たち五、

六人グループを仕切っている子だ。ウチは進学校なので、秋川さんも渋谷センター街のコギャルほど下品にデコレーションしてはいないが、髪を茶色に染めて爪にネイルアートを施しているあたり、TVや雑誌等で喧伝けんでんされる、イメージとしての《今時の女子高生》に近い人種で、どちらかといえば私とは縁遠い存在である。

「それぞれ好きな芸人を挙げてった中で、マコちゃんだけ六代目志ん生とジョン・クリーズやもんなあ。渋過ぎやでそのセレクト」

「空気読めない発言で悪うござんしたね。ど〜せ私は落語とモンテイ・パイソン大好きな変わり者女子高生ですよ、ええ」

開き直った私が、ふと携帯を開いてネットニュースをチェックしていると、昨夜私の住む県内のスナックで起きた、暴力団幹部が内部抗争で刺された事件の続報が目に入った。

「意識不明のまま搬送先の病院で死亡、か。こないだの隣町で起きたストーカー殺人事件といい、何か最近うちの近辺も物騒になつてきたわね」

県警に勤務する兄貴の話によると、今年の四月に県内最大勢力の暴力団で組長の代替わりがあり、そのゴタゴタで外部組織も介入しての暴力団同士の抗争が激化しているという。

件の暴力団くだんは県庁所在地の住宅街 御子柴本家から百メートルくらいの場所に組長宅兼事務所を構えており、先日、兄貴の車で本家に行った際にその前を通り過ぎた。

刑務所のそれと遜色そんしよくなくらいに高いコンクリートの塀には有刺鉄線が張り巡らされ、門の前では人相の悪い見張りが目を光らせ、その近くでは制服警官も険しい面持ちでスタンバリ、門の向かいの屋敷の塀には《暴力団は出ていけ》と大書された横断幕が掲げられと、現場のピリピリした空気が判り易く可視化されていた。

「そ〜いや、今年の初めにウチの市内の定時制の生徒が逮捕された事件があつたやん」

「ああ、初日の暴走で検問に引っ掛かって身体検査したら覚醒剤出てきたってアレね」

普段事件らしい事件もない平和な我が街だが、この事件は昨今の治安低下に伴う薬物汚染が地方の青少年層にまで広がっている深刻な一例として、地方紙だけでなく全国的にも大きく取り上げられた気がする。

学校は違えど私たちもその余波をくらい、しばらくは放課後ファミレスに夜遅くまで溜まるのは自重せざるを得なかった。

「あれもその暴力団経由で薬物が流れたつちゆう噂聞いたけどホンマ？ 暴走族ってほとんどヤクザの下部組織みたいなもんやし」

「さあ、それは売人が逮捕されてないから何ともいえないわね。パクられた連中も売人の顔はよく見てないみたい……てゆゝか、その売人は面が割れないようにサングラスで顔を隠してたそうよ」

「ふゝん。パクられた、面が割れない ね」

春水はいきなり底意そこいの感じられる顔付きでこちらを見た。

「何よ気持ち悪い」

「いや、マコちゃんも随分警察用語が板に付いてきた思うて。やっぱり将来は耀よしみ一さんと同じ道に進むん？」

「まっさか」

上司の警備部長に連日下心見え見えで擦り寄られて閉口している兄貴の姿を脳裏に思い描き、私はふんと鼻を鳴らした。

「兄貴と同じ苦勞をしょい込むのはたくさんよ。まだはつきり決めてないけど、大阪か京都の大学に行つてそつちで就職しようかなと今のところ思つてる。私もいい加減兄貴離れしないとだし。それにね、昔と違つて今は縁故採用あまりしないのよ警察つて。《でもしか》でなるんじゃないかって人事かえに思われて却つて敬遠されるんだつて」

私は兄貴から聞いた話を口移しに言うと、春水の目の前に人差指を立てた。

「で、そう言うあんたの方こそどうすんの進路？」

そついえば、私たちの間でこれまで進路について具体的な話をしたことはあまりなかった。「昨日のあれ観た？」とか「このキャラ

「どうやって攻略すんの？」とかたわいもない雑談ばかりに専ら時間を費やしていたのは、私の好きな作品の《水は低きに流れ、人の心もまた低きに流れる》という格言通り、モラトリアムという甘美な区分の賞味期限が近付いてきているという現実から目を逸らしていたのかも知れない。

「そう、私は極力想像したくなかったのだ。春水ともいつかは物理的にも精神的にも毎日のように時間を共有する関係ではいられない」といって、ごく当たり前の未来を。

「春水はしばらく私の人差し指を深い海のような瞳で凝視していたが、やがて『ほな笑わん』と予防線を張った上でおもむろに口を開いた。

「声優になる思てんねん」

まさか　という言葉が喉元まで出かかったが、春水の目が真剣なのに気付いた私は慌ててその言葉を呑み込んだ。

「声優か、それはまた思いきったわね」

「ウチ、これまでアニメにさんざお世話になってきたから今度はウチがアニメに恩返ししたい思うて」

「あんたにしては随分殊勝な動機じゃない。じゃ卒業したら実家出るの？」

「うん、上京する予定」

収録スタジオは都内に集中しているので、本気で声優になろうと思えば上京するのが一番だろう。一方私は今のところ上京までは視野に入れていないので、現状のままでは春水とは卒業後離れ離れになることが確定ということだ。

「ま、今はどこの専門学校や養成所がええか色々下調べしてる最中やけど。夏にもしかしたら力試しで一般公開オーディション受けてみるかも知れへん」

「春水らしいっちゃらしいけど進路調査の時に担当の先生に呼び出されそうね」

東大首席も狙えそうな天才が声優志望

進路調査表を見た先生

たちの驚く顔が今から目に浮かぶようだ。恐らく一回は進路相談室に呼び出されて、考え直してSランクの大学に進学するよう言われるに相違ない。

「ま、オタクのあなたには天職だと思うから私は応援してあげるけどさ」

応援、口に出したその言葉がブーメランのように私の心に突き刺さった。

本音を言えば応援の気持ちもなくはないのだが、それ以上に、とにかく地元を離れて御子柴のしがらみから自由になりたいという消極的な動機を軸に進路を設計しているに過ぎない自分に比べて、自分の目標を確立して将来に向けてしっかり歩み始めている親友への羨望、焦慮、嫉妬 それらの感情の方が強かった。

「まあ、せいぜい武道館で三日連続でライブが出来くらいにはなることね」

頭の中のドロドロした雑念を振り払いながら、私は敢えて憎まれ口を叩いた。

「サンクス」

私の胸中を知ってか知らずか、春水が綺麗な白い歯をこぼして笑ったその時、目的の駅にまもなく到着するとアナウンスが流れた。

分厚いガラス窓に切られた遠景の山々の稜線は今しも鮮やかなオレンジから青紫に移り変わるところで、市のシンボルの天守閣に投げかけられた残照が屋根の瓦に反射して、私の視界にも射し込んできた。

JR白陽線に乗り換えようとホームに向かうと、先端付近の喫煙所で紫煙を吐き出しながら連れと談笑していた釣りの帰りっぽい風

体の男性に「お〜い」と胸間声で呼ばれた。

ドキッとした私は臆病な小動物のように身を竦めた^{すく}が、ホームの屋根の灯りを受けて光り輝く男性の頭を確認した瞬間、相手の身元に思い当たって警戒を解いた。

「理事長〜、それに大宝寺先生も」

春水はフレンドリーな様子で喫煙所の方に歩み寄っていく。

そこにいたのは、私たちの学ぶ^{けいりん}経倫館高校の^{こいぬま}鯉沼理事長と生物の大宝寺先生だった。

「うおっまぶしっ」

春水がわざとらしく両目を覆って腰を引くと、理事長は仕方ない奴だという風な半笑いを浮かべて吸殻入れに煙草を投げ込んだ。学校の最高権力者にこんな態度を取れる生徒は、日本広しといえどもこいつだけではなかるうか。

鯉沼家は旧幕時代に白陽藩三万石に代々漢学者として仕えた家で、維新後は旧来の藩校を旧制中学へと発展させた《経倫館中学校》を創立し、地元の士族や地主やブルジョア階級の子弟に英才教育を施した。戦後の教育基本法制定で中学校・高等学校に分割されたのに伴い《学校法人経倫館》が設立されて現在に至るが、学校の経営は戦前から一貫して鯉沼家が担っている。

創立者から数えて六代目の現理事長・鯉沼清明^{せいめい}は御子柴家とは遠い姻戚関係で、本家の集まりにも何度か顔を出していたから、互いにまんざら知らない仲でもない。

「今日はまた大宝寺先生とフィッシングですか」

春水が訊くと禿頭を撫^なげながら理事長が頷いた。

「ああ、泊まりがけで観光がてら伊豆まで行ってきたよ。お互い男やもめだから気楽なものさ」

理事長の奥さんは五年前に病死して、私と兄貴も通夜には顔を出している。

「伊豆か〜、ええなあ」

「うん、天気にも恵まれて最高の釣り日和だったよ。料理も旨くて

温泉も気持ちよかつたし、日々の雑務を忘れてリラックスしたね」

「え、理事長ってそない忙しいん？ 何や、肘掛け付いた革張りのチェアに座ってゴツい机の前で偉そうにふんぞり返ってるだけやないんですか」

これには理事長も苦笑い。

「……君は入学式の時から相変わらず失礼だね」

理事長がため息交じりで言った《入学式の時》というのは、昨年の私たちの入学式で春水が新入生代表で挨拶を読み上げようと壇上に立とうとした際、音響機器のコードにつまづいて側にいた理事長に向かって派手にダイブをかまし、理事長が当時着用していたカッラをもぎ取ってしまった事件を指す。

一週間ほど経って、その日日直当番だった私が日誌を取りに職員室付近まで来た時、そこには元気に走り回る、ユル・プリンナーを彷彿とさせる綺麗なスキンヘッドに変貌を遂げた理事長の姿が。

いや、走り回るといのは嘘だが。どうやら当人開き直つたらしかった。ちなみにユル・プリンナーという形容は私ではなく、その時一緒にいた《映画秘宝》を愛読する中学以来の友人・綾瀬遊あやせゆうの言である。

「理事長って仕事もこれでなかなか忙しいんだ。決済せにやらん書類は毎日山のようにあるし、県の役所や文科省にも認可をもらいにたびたび出張して、息子ぐらいの歳の役人方に平身低頭せにやらんのさ。何なら明日から私の代わりにやるかね、為永君」

それにしてもこの理事長、ノリノリである。きつと釣果が上々でハイになつてるんだらな、しかもちよつち酒臭いし。

「先生、理事長ってこない絡み酒なんですか」

さすがの春水も少し困った顔で、それまで理事長とのやり取りを微笑ましげに見守っていた大宝寺先生に助けを求めた。

「ああ、酒の席ではいつもこんなで僕が介抱役だよ。で、翌日になるとケロリと忘れてやがんだよなあ」

先生は銀歯を数本覗かせて苦笑いすると、仕方ないと言う代わり

に軽く肩をシユランクした。

大宝寺誠彦先生は去年で定年を迎えているが、引き続き囑託として奉職している。髪はロマンスグレーで背が高くスマート。まるで英国紳士のような雰囲気、授業も判り易いので生徒からの人気は高い。

釣りの他にはアクアリウムが趣味らしく生物室には立派なベルリン式水槽が鎮座ましましていて、中では色鮮やかなチョウウオウオオがサンゴやイソギンチャクと戯れるように泳ぎ回っている。チョウウオウオオの飼育は難しいともの本で読んだことがあるので、先生はアクアリストとしてはかなりの技量の持ち主なのだろう。

校舎の中庭には灌木かんぼくに囲まれた中に人工池があつて、そこに一匹数百万は下らないと噂の錦鯉が十数匹悠々と泳いでいるのだが、その世話も先生の担当らしく昼休みに白衣姿で餌をやっている姿を時折見かける。

つと、駅員の間延びした方言交じりの「間もなく発車しますので御乗車になってお待ち下さい」という、音が割れ気味のアナウンスがホームに流れた。

「ほら清ちゃん、そろそろ汽車出るから乗ろう」
呑気に煙草をふかしている理事長を先生が促す。汽車という古びた言い方が先生のそれまで歩んできた人生の重みを感じさせる。

理事長をファーストネームで呼べる教師も大宝寺先生くらいだろう。以前、司書教諭の真奈美先生まなみが雑談交じりに話していたところによると、鯉沼家と大宝寺家は親戚関係で二人ははとこ同士だという。

私たちも電車に乗り込んで七人掛けの椅子に並んで腰を下ろすとすぐ発車ベルが鳴ってドアが閉まり、妙に甲高いモーター音と共に電車が動き始めた。

「そういえば、二人は今日どこに出かけてたんだね」
理事長が訊いてきた。

「大阪でフリーマーケットに出展してきました」

少し考えて答えた。ま、嘘は言っていないし。

「それでわざわざ大阪まで行ってきたのかね。フリーマーケットなら県内でも結構開催されてると思うが」

味付海苔のように太い眉毛を寄せて怪訝けげんそうな顔をする理事長。そんな疑問空気に読んでスルーしてくれりゃいいのに。

そして、理事長の視線は私たちの足元に置かれた戦利品が大量に詰まったバックに向けられている。思わず冷や汗。あの中を見られるのは色んな意味でヤバイ。

「つ、ついでです。梅田のショップで出た夏物の新作買いたいなと思つて」

昨日日本屋でコミックを買うついでに立ち読みした情報誌で梅田のショップを特集してたのを思い出して適当に誤魔化した私は、

「ね、ねえ春水」

と、隣でニヤニヤしながら傍観者を気取っていた春水に爾後ごしの対応を押し付け 否、バトンタッチした。

「ええ理事長、二人でひと夏の甘くいアバンチュールに備えてセクスイーな勝負下着買ったりしたもんな、マコちゃ いでででっ」

うん、こいつに振ったの間違いだつた。私は春水の膝をつねって黙らせる。

「際どいジョークはやめてちょうだいね、春水」

さもないと殺すわよ、と目で言葉の続きを伝える。

「済んません……」

「はは、あまり堅いことは言いたくないが過ぎた異性交遊で先生方を煩わすような真似はやめてくれよ」

大宝寺先生が穏やかに釘を刺すと、理事長は玩具の水飲み鳥よろしく何回も大仰に頷いて、

「うんうん、大宝寺先生の言う通りだな。今年初めに起きた暴走族覚醒剤事件のこともあるし、思わぬ犯罪に巻き込まれて警察沙汰にならないよう二人とも充分注意するように」

ことさら厳格な口調でひとしきり説教を垂れたが、自分で口にし

た《警察沙汰》から連想したらしく、

「そついやお兄さんは元気かね」

と、私に訊いてきた。

兄貴は経倫館のOBで東大卒業後、若干の紆余曲折を経て目下県警の警備課に勤めている。平たく言えば公安刑事である。

「ええ、仕事は凄いい忙しいみたいですけどお陰様で元気です」

殺しても死なないくらい、と心の中で付け足した。

「ふ〜ん……耀一君は将来お祖父様と同様我が県の枢要を預かる地位に就くべき人材だからな、バリバリ働いて出世してもらわんと」

「は、はあ」

私は生返事をした。もし兄貴が今の聞いたら笑いだすんだろつなそれに、妹に同人誌のおつかいを平然と頼む人間に県の未来を委ねるのはどうかと思う。

「祖父の地盤はとうに別の方が引き継いでますし、兄にはそんな気は」

私が嫌々ながら生臭い話題を口の端に乗せようとした時、理事長の着ているベストから携帯のバイブ音がした。理事長は携帯を取り出して着信履歴を確認して、また懐に戻した。

「どうしたい」

大宝寺先生が訊いた。

「うん、手島先生の事務所からだった。帰宅したら掛け直さんと」

「昨日の首相の解散発言の絡みかね」

「だろつな、どっちにしる今年の秋までには総選挙は確実だし。そろそろ先の予定を固めてもらわんと」

「ま、僕は全くのノンポリだから無関係なところで見守らせてもらつよ」

何やら生臭い話である。

私と春水は無関心を装って向かいの車窓に同時に視線を移し、闇一色に覆われた窓ガラスにどことなく所在なげに映し出された互いの姿をしばし見つめていた。

白陽駅に到着してタクシーに乗り込む理事長と大宝寺先生と別れて数分後、兄貴の運転する迎えのヴィッツが来た。

キャリアバッグを車の後ろに積み込み、春水と一緒に後部座席に乗り込んで車がスタートしてすぐ、私は帰路の途中で理事長たちに出会った時のことを話す。

「そりゃ野党の現職の手島代議士のことだな」
ハンドルを右に切りながら兄貴が言った。

「野党？」

不可解に思った私はオウム返しに尋ねる。御子柴本家は与党県支部を仕切ったり大物県会議員の後援会長を務めたりしている有力党員だから、縁続きの鯉沼家も普通に考えれば与党支持のはずなのだが。

「まっ、それは色々複雑ないきさつがあつてだな」

バックミラーに映した顔を少し曇らせて、兄貴は言葉を接いだ。

「ここの選挙区はかつては無風区　与党の磐石な地盤だったから、ずっと与党の宮原代議士みやはらの独り勝ちで、鯉沼理事長もその後援会に名を連ねる有力な支持者だった。

党の最大派閥に属する宮原代議士は政務官、副大臣と順調にステツプアップしていき、前政権の第二次内閣改造では文部科学大臣に任命されて遂に閣僚入りを果たした。党内ではいずれ総裁候補の一人とまで目されていたんだが　大臣に就任してわずか一週間後、地元で開かれた現在の教育問題を考えるシンポジウムの席上で、致命的な失言問題を引き起こしてしまつたんだ」

「あつ、それウチ覚えてます。確か……徴兵制度があつた頃は学級崩壊はゼロだった、ちゅう発言でしたっけ」

春水がシートからひよいと身を乗り出して口を挟む。

「そう。で、野党の厳しい批判を浴びたのは勿論、党内からも大臣としての資質を問う声上がり、十日も経たずに辞任　事実上は更迭されて経歴にすっかりミソを付けてしまい、総理総裁への夢も露と消えたという訳さ。当人もしまいには依怙地いこじになったのか、委員会の議事進行を混乱させたことは謝罪したものの、問題視された発言に関しては《自分の政治的信念である》と頑として撤回しなかつたがね。

が、戦前の軍国主義を礼賛するようなその態度に、元来リベラル寄りの政治的立場だった鯉沼理事長がいたく腹を立て、突如袂たもとを分かつて野党支持に転じ、大々的に反宮原キャンペーンを展開したんだ。理事長は昔、幼い弟と妹を終戦の年の六月末の空襲で失っているそうだから、心情的にも代議士の発言を看過出来なかつたんだらうな。

地元の政財界にも顔の利く理事長を完全に敵に回した宮原陣営は、失言問題も尾を引いてか前回の選挙ではまさかの大敗を喫し、野党の新人・手島氏に議席を奪われた。で、党執行部の思惑で比例代表の名簿順位も下げられていたから、復活当選もなし。一夜にして、《先生》からただのニートにジョブチェンジしたって訳さ」

一夜にしてなれる職業は、政治家と売春婦だけ　という何かの本の台詞を思い出した。え〜と、原ウツハラ？だつたつかしらん？

「ほんなら、自分の時まいた種やねんけど宮原陣営からしてみればおもんない気持ちでしょうね〜」

春水が言った。

「だろうね。特に、自分たちの陣営を離反して落選の要因を作った理事長に対しては、午前零時に地獄通信にアクセスしたいくらい恨み骨髓に徹してるんじゃないかな。最近では永田町に解散風がひつきりなしに吹いているから、さぞかし雪辱の念に燃えていることだらうね。手島陣営の選挙活動を妨害するために県内の右翼団体にしきりに働きかけているという有力な情報も寄せられて　つと、僕ら

が君に語るのは例えばそんなメルヘン」

何とも酷い小芝居である。

「……白々しいってレベルじゃないわね」

聞こえよがしにため息をついてやった。その右翼団体とやらの動向を探っているのは他ならぬ兄貴自身だろうに。でなきゃ、そんな込み入った事情を淀みなく喋れるはずもない。

「大宝寺先生を真似する訳じゃないけど私もノンポリよ。そんな雲の上でのドロドロした争いなんか、例え本家が絡んでも毛ほども興味ないわ」

宮原陣営が鯉沼家の姻戚である御子柴本家に接近するというのは充分考えられるシナリオである。無論私は何の力もない可憐な一女子高生に過ぎないから、興味を持つ持たないに関係なく百パーセント蚊帳の外な訳だが、

「ノンポリね、俺も部長に一度でいいからそんな台詞を吐いてみたいよ」

権力機構の末端に身を置く兄貴の方は、対岸の火事を決め込んでばかりもいられないらしい。その投げ遣りな口ぶりから警備部長と何やら一悶着あったことは明白だったが、武士の情けで気付かないふりをした。

うちの県は保守王国だから右翼団体には警察力も及び腰になることが多い。兄貴の話聞く限りでは政治的な行動がお好きらしい部長のことだ、兄貴の監視対象の団体に手心を加えるよう要請し、ついでに宮原陣営のメッセンジャーボーイの役目も果たした。まあ、こんなところだろう。

我ながらここまで気が回る自分が、少し嫌になる。

「ホンマ大変ですね」

春水が同情に堪えないという顔をした。その顔は半ば私にも向けられている気がする。

「ああ、願わくは今すぐにも捜査一課に転属したいもんだよ。今は我が愚妹が買ってきた粟おこしと同人誌だけが心の慰めさ……」

「キモいつつの」

それと愚妹言うな。

「そんなボヤかんと元氣出して〜な、耀一さん。今日のイベントで撮ってきたお宝写真あげますから」

春水はバツクの中からデジカメを出して、信号待ちをしている兄貴に中の画像を見せた。私が万条の仕手に扮している姿を。

画像を一瞥へつした兄貴は私に視線を移した。視線がおもむろに私の上から下まで一往復する。

「な、何よ」

「……俺の愚妹がこんなに可愛い訳がない」

失礼千万であります。それに二回も愚妹言うな。

「ま、中身はともかく春水ちゃんの縫った衣装がいいからな衣装が。大事なことから二回言うけど」

「ええ、ウチの一途いちずな愛情その他口に出すんは恥ずかしい諸々の想いがこもってますから」

いや、その他諸々が非常に気に掛かるんだけど。

そうこうしているうち、車が春水のマンションの前で停まった。運転席を降りた兄貴が後ろに積んだ春水の荷物を下ろす。

「おおきに耀一さん。ほなマコちゃん、また明日」

車を降りた春水は何度か手を振るとツインテールを春の夜風に揺らしてくりと背を向け、キャリーバッグの車輪をガリガリと鳴らしながら、そこはかとなく硬質でよそよそしげな灯りに照らされたエントランスに入っていった。

クラクションを軽く二回鳴らして、建物の中から更に手を振っている春水に別れを告げた兄貴は、鮮やかなハンドルさばきでヴィッツをシターンさせて一路自宅へと向かう。

「……また明日、か」

ドアにもたれた私は無意識の裡に、春水の去り際の言葉を口に出して反芻はんすうしていた。私と春水はいつまでこの言葉を自然と口に出せる距離でいられるだろうか、そう思いながら。

【問題編3】夜明け前より百合色な

翌日、すがすがしい気分が目覚めた私は枕元の時計を見て驚愕した。

「げっ、七時四十五分！」

寝汗が染みたピンクの水玉模様のパジャマをベッドの上に脱ぎ捨て、深緑の地にアイボリーの可愛いリボンが付いたどこかで見たようなセーラー服に着替えた私は、家中にドタドタと足音を響かせながら転げ落ちんばかりの勢いで階下に駆け下りる。洗面台で手早く最低限の身だしなみを整え、ダイニングテーブルの上にある折り畳み式の蠅帳が被さった兄貴の食べ残しらしきトーストを口にくわえて、

「あ〜ん、遅刻遅刻〜」

玄関のドアに施錠するのももどかしく自宅を出た。

「ヤッバ〜、今日転校初日だってのに」

いやに説明的な台詞を口にしながら、眩しい朝の光に照らされた通学路をひた走る。そして目抜き通りのバス停に到着し、列の最後尾に並ぼうとした瞬間　世界に異変が生じた。

視界が急に緋色がかったかと思うと、私の周りの人々がまるでビデオの一時停止モードのようにぴくりとも動かなくなったのだ。

「ど、どうしたんですか」

得体の知れない恐怖をひしひしと感じた私はすぐ側にいる、大口を開けてあくびをしながら携帯を覗いた状態で彫刻のように固まっているサラリーマンの肩を何度も叩いたが、やはり反応は皆無だった。

栗立った背筋をねばっこい汗が伝う。

急激に荒くなる自分の呼吸を聞きながら足元に視線を落とすと、ファンタジー系でよく出てくる解説不能な文字で書かれた魔法陣が、蛍光塗料のよな淡い光を放ってアスファルト一面に浮かび上がって

いる。魔法陣は直径数十メートルはあるだろうか、静止している人
たちをすつぱり覆い尽くしていた。

何なのよ、これ？

パニック状態であたふた辺りを見渡していると、静止している人
たちがいきなり燃え始めた。ひつと声にならない悲鳴を上げて身じ
るのだが、すぐ全然熱くないのに気付く。

その、静止している人たちを覆う燐光のような青白い炎は大きく
揺らめきながら徐々に小さくなっていく。炎の先端は糸のように細
くなり、それぞれ一定の方向に向かっていった。

一体どこに向かってるのだろう？

視線を上げたその時 大地をひっくり返すような凄まじい振動
が二度、三度と身体を貫いた。

「あれえ、この人間封絶の中で動いてるぞお」

甲高い不気味な声が頭上に降り注ぐ。振動の主は巨大な人形だっ
た。

全身白磁のようにすべすべしていて大きさは普通の人間の三倍ほ
ど、子供の首が二つ付いている。いわゆるスパイダーウォークの体
勢をしているがその二つの首は百八十度あらゆる角度に曲がっており、
生理的な嫌悪感を催さずにはいられない代物だった。

一方の首が耳元まで裂けた口をガバツと開けると、青白い炎が束
になって溶鉱炉のように赤い口の中に吸い込まれていく。そして、
もう一方の首は耳障りな笑い声を立てながら私の方を向いて、

「もしかしてこいつが噂のミスレスかあ、御主人様にいい土産が
出来たぞ」

と、血のしたたるような残忍な表情を浮かべた。

封絶、ミスレス……唐突にそんな電波なタームを連発されても何
のことやら皆目判らない。いや、本当は判ってるんだけどそれは口
にしない方がベターだろう、世間的に。

私の本能は生命の危機を察してこの場から逃げるよう告げていた
が、その必死の指令も限界を超えた恐怖におののいている全身の筋

肉には少しも届かなかった。

「いただきます」

不気味人形のもう一方の口も大きく開き、私を呑み込もうと急接近してくる。

迫り来る死を直視するのに堪えきれず、胸の前で両手を固く握り合わせて目を閉じた刹那、私の聴覚に斬撃の音が響いた。

「ぐぎゃあああつ」

目を開けると、私の足元にさっきまで私を喰らおうとしていた不気味人形の首が転がっていた。一方の首を失った人形本体は切断面から燐のような炎をまき散らしながら、苦痛に身悶もたえている。

「派手に喰い散らかしよつて、こりやまた随分と行儀悪な燐りんね子や。あんたの御主人様とやらは初歩的なテールマナーも教えとらんのかい」

軽やかな身のこなしで、私と不気味人形の間一人の少女が宙から下り立った。

「……つて、春水じゃん」

「ウチ、参上！ お待たせマコちゃん、ヒーローは遅れて現れる」

着地の衝撃にたなびくそのツインテールは紅蓮の炎のような輝きを放ち、手には人形の首を一刀の下に断ち斬ったとおぼしき秋水が握られている。その刀身は月明かりのように冴えざえとしており、神々しい雰囲気きんげいで周囲を圧していた。

「それがメキシコ式」

「いや、そんなけつたいな格好で何やってんの春水」

「てゆゝか完全に銃刀法違反だから、それ。」

「ノンノン、そない野暮なツッコみはノーサンキューやでつ。それに今のウチは春水なんて俗な名前ちゃうねん」

「俗な名前つて……じゃ何て呼べばいいのよ？」

「炎髪灼眼の討ち」

まんまかよ。どうせ好物はメロンパンって設定がこの後出てくる

んだろな。

「あのね、春水……我が国には著作権法というれっきとした法律があるの。いい加減にしないと色んな方面からお叱りが」

「お前らいつまで二人の世界つくってる気だ、人の首斬り落としとして無視するなあ〜っ」

会話に入らず放置プレイを余儀なくされていた不気味人形がすっかりお冠の様子だった。いや、人じゃないだろあんだ。

「妬かない妬かない、人の恋路を邪魔する奴はポン刀に斬られて死んでまうで」

そう言つて口元に不敵な笑みを浮かべた春水は、刀を正眼に構える。

「許さない、絶対許さないぞお前ら。二人とも仲良く食べてやる〜っ」

不気味人形は怒り心頭に発したらしかった。凄まじい勢いで右腕を振り上げ、地の割れるような咆哮ほうごうと共に春水を押し潰さんとしたが、

「甘い、そない蚊も殺せんワンパターンな攻撃が通用するかいな」
相手の動きを見切った春水は体をかわして攻撃を避けると、鮮やかな身のこなしで空中を舞う。前につんのめった人形が体勢を整えるより早く、春水の刀が一閃して二つ目の首を胸から切り離していた。

「ひぎゃああああっ」

二つの首のあったところを必死に押さえ、甲高い悲鳴を上げながら身体を激しくよじらせる不気味人形。

「やかましいから早よ消えや」

そう吐き捨てた春水は再び跳躍して人形の腹部に下り立つと、逆手に持ち直した刀を振りかざして心臓部に深々と突き刺した。不気味人形は更に甲高い電車の急ブレーキを思わせる断末魔を上げて朽木が倒れるように地に伏し、青白い炎に包まれて灰も残さずに燃えていったのだった。

そして、刀身に付いた燃えかすを勢いよく振り払って刀を収めた春水がこちらに振り向きざま、

「無事やった？」

私の両肩に手を置いて心配そうに尋ねてきた。

「ええ、色々ツッコみたいのはやまやまだけど」

笑顔で応えた途端、全身に安堵の波が満ちてきた私はへなへなとその場にへたり込んでしまった。心の中に渦巻く「さつきからどこかで観たようなシーンが続くよなあ」という既視感には取り敢えず目をつぶることにする。

「どうせ、私は存在の力を既に喰われちゃってるって設定なんだろうけど……何はともあれ、助けてくれてありがとう」

すると、いきなり真剣な面持ちになった春水は、

「ほな、助けてあげた対価を払ってもらわな」

神妙な口調でそうささやきながら急に顔を寄せ、私の唇を優しくふさぎ。

目を覚ますとすぐ近くに春水の顔があった。

「はよっ、マコちゃん」

「うっん」

ベッドに横たわったまま伸びをすると右手が何やら固いものに触れた。見ると、昨日就寝する前に父の書斎から引っ張り出して読んでいたハンス・ベルメールの写真集だった。

ベルメールは、一次大戦後の混沌の中で前衛芸術が大輪の花を咲かせたドイツ・ヴァイマル時代末期に登場したシュールレアリスム芸術家で、球体関節人形の第一人者である。澁澤龍彦が紹介して以来、我が国の人形作家にも多大な影響を与えているらしい。

さつきの夢に現れた《ぼくのかんがえた》燐子の原形はどうやらこの本に載っている人形らしかった。道理でグロかった訳だ。

「今日もまるで天使のような可愛い寝顔やったで」

春水は唇にいとおしげに手を当て、何かをやり遂げた後のような

満足げな微笑みを浮かべている。

妙に気になって、眠い目をこすりながら自分の唇に手を当ててみると、かすかに濡れている。私は反射的に春水の後頭部にげんこつをお見舞いしていた。

「いでつ、暴力反対ラブ&ピースやでマコちゃん」

「黙れこの変態」

ベルメールと同時代の分析心理学の祖ユングが唱えた概念に、シンクロニシティというのがある。単純明快に言えば《意味ある偶然の一致》ということになるのだろう。てゆくか、以前素人向けの心理学の入門書を読んで覚えた単語に過ぎないから自分にはこれ以上説明のしようもないが。

後になって考えると、昨夜ベルメールの本を読む気になったのもその人形が夢に出てきたのも、これから起こる出来事の暗合だったのかも知れない。が、今の私は当然ながらそんなことに気付く由もなく、

「とにかくくつ、さつさと出て行ってはこのキス魔」

顔面に枕を投げ付けて春水を部屋から放逐し、灰色のブレザーに緑のチエックのスカートの制服に着替えるのだった。

我が経倫館高校には、校舎とは別棟で煉瓦建ての立派な図書館がある。受験生のために朝の七時半には開放され、司書教諭の浦真奈美先生の他に図書委員二名が週番制で貸出・返却業務を行なっている。

ぶっちゃけ、高度経済成長期の受験競争華やかなりし頃ならいざ知らず、今日び発明家の子孫の家の某隣人みたいに身を粉にして勉

学に励む生真面目な生徒なんてそうそういるはずもなく、この時間帯の図書館の人の入り具合は箱物行政で建てられたテーマパークのそれにほぼ等しい。

今となつてはすっかり形骸化^がしてしまったこのシステムが未だに廃止されないのは、これから社会人となる生徒たちに自分の職務に対する責任感を培ってもらいたいという、学校側の意図が込められているのだろう。ま、そう最大限善意に解釈してみたところで、超低血圧体質で寝起きの悪さには定評のある自分にとっては大きなお世話でしかないのだが。

「はあく、図書委員なんてなるんじゃなかった」

七割くらいの乗車率で高校に向かうバスの中。手すりにだらんと身を預けた私があくびをかみ殺すと、

「マコちゃん、それ当番が回ってくる度言つとるで」

春水にツッコまれる。

「だって何回やっても嫌なものは嫌なんだもん。で、行ったはいけど全然暇でやることないしさ。これが金曜まで続くと思うと憂鬱にもなるわよ」

「ウチはちつともそない思わんけどな」

そう、こいつも私と同じく図書委員なのだ。彼女が図書委員になった理由は単純明快で、その権限を活用して自分の読みたい本を入荷させるためというものであった。彼女が委員になった途端にコミックとライトノベルの蔵書が飛躍的に増えたのは言うまでもない。てゆゝか職権^{ちん}濫用？

「むしろウチにとっては最高にハッピーな一週間の始まりやで」

「何だよ？」

「だって二人きりの空間でマコちゃんとイチャイチャ出来るんやもん、こない嬉しいことはないでっ」

「……余計に憂鬱だわ」

私は聞こえよがしにため息をついた。そもそも真奈美先生も一緒

にいるだろ。

「じゃ3Pでええやん」

あなた、最低です。

再度大きなため息をついたその時、途中のバス停で早くも夏服に衣更えした元中の友人・綾瀬遊がエナメルのスポーツバッグ片手に乗車してきた。

陸上部の練習で陽に灼けた健康的な小麦色の肌が白いシャツによく映えている。

「よっつす」

乗客をかき分けてこちらにやって来て、ひょいと片手を挙げて挨拶する遊。

「二人ともこんな朝早くに登校なんて珍しいな、特に御子柴」

物珍しげな顔でしげしげと見つめられる。いささか傷付いた。

「……図書委員の仕事よ」

「だよな、でなきや御子柴がこんな時間に登校なんてベトナムで夕日が海に沈む以上にあり得ないし」

酷い言われようだが、的を射ているので反論出来ないのが悔しい。

「まっ、どくせまた為永にお目覚めのキスで起こしてもらったんだろ」

「ええ、今日もこいつに唇を奪われたわ」

私は春水に鋭い視線を投げ付けて糾弾するが、当人は少しも悪びれずに、

「だってマコちゃんの寝顔がごつつう可愛くて唇が無防備過ぎるんやもん、そらウチかて出来心の一つも起こしてもしやあないやん」

ほとんど痴漢の言い訳を聞いているようである。

「おっ、そっいや遊はもう夏服にしたん？」

整った顎に手を当てた春水が、妙に熱っぽい面持ちで遊を見つめた。

「うん、一足早く衣更え。もうブレザーなんて暑くて着てらんないし」

いかにもスポーツ推薦で入学した健康優良児らしい発言である。インドア派の私なんかは日中はともかく朝夕は半袖じゃまだ肌寒いんだけどね。

「衣更えかぁ……もうすぐ女子の透けブラや脇チラが眩しいワンダフルな季節がやって来るんやな」

にんまりと下卑た表情を浮かべた春水は、私とおつつかつつな遊の控え目な胸元に目を凝らして、

「青のスポブラやな、健康的でなかなかよらしい」

「……もしこのバスの路線で痴漢事件起きたら犯人絶対こいつよね」私のコメントに遊は力強く頷いて、

「うん、あたし為永が逮捕されて裁判沙汰になったらこう証言してやるんだ」

そして、私たちは心を一つにして唱和した。

「いつか絶対こんな事件を起こすんじゃないかと思ってました！」

「二人とも酷いでっ」

こんな下らないことを言い合っているうちに《経倫館高校前》に到着し、私たちはバスを降りた。

校門に差しかかったところで後ろから自転車のベルを鳴らされる。振り向くと、

「よっ、三人娘」

司書教諭の浦真奈美先生の姿があった。

四角いフレームの銀縁眼鏡を掛け、アップにした髪を団子に結わいている。濃褐色の上品な仕立てのスーツに高級ブランドのスカーフを巻いていて、有能な社長秘書といった雰囲気を出している。実際、大学を出て数年は東京の出版社で雑誌編集者としてバリバリ働いていたらしい。

いつもなら当番の図書委員より早い時間に来てとつくに図書館を開けているはずなのに、こんな時間に登校とは珍しい。

「昨日、久しぶりに高校の友達と呑んじゃってさ」

ばつが悪そうな顔でペロりと舌を出した先生が、

「テンション上がって結構ハイペースで呑んじやったから、朝目覚まし鳴っても布団からしばらく起きられなくて」

そう言つてパールの入った濃い目のシャドウを塗った目をしばたかせると、身を乗り出した春水がニヤリと笑つて、

「先生も今年で三十路に突入やからテンションに身体が付いていかんのとちやいますか」

「こおら」

真奈美先生はグーにした手を挙げて春水を殴る真似をした。

「教師に向かつてそんな口の利き方するなんていい度胸じゃない、為永さん」

まあ理事長にもこんな調子ですから、こいつ。

真奈美先生の近くから身を翻した春水は私と遊の方に向き直つて、

「褒められちつた、テへ」

「褒めてない褒めてない」

二人で右手を左右に振つて同時にツッコんだ。

「あははは、あなたたち相変わらず息ぴったりね」

ひとしきり口を開けて派手に笑つた先生は昇降口の手前に差ししかると、

「為永さん御子柴さん少し図書館の前で待つてね、すぐ職員室行つて鍵取つてくるから」

と、押していた自転車を右折させてクラブ棟の裏手に位置する駐輪場に向かつていった。

「じゃ、あたしも部室行くから」

そう言つて手を振つた遊がクラブ棟の方に駆けだそうとした時ガシャン、と自転車の倒れる音がした。

先生に何かあつた、そう思った私たちが急いで駐輪場の方に向かうと果たして十メートルほど行ったところで道の真ん中に自転車が倒れており、先生が棒立ちになっていた。

「どうしたんですか」

心配して尋ねると、先生は焦点の合わない瞳をこちらに向けて小刻みに震える指であらぬ方向を示した。

「あ、あれ……」

あれ？ 指差された方に視線をやると、駐輪場の入口に植わっている五メートルほどの高さの榎の枝に、何かがロープに吊られてぶら下がっていた。

目を凝らした私ははっと息を呑んだ 見覚えのあるキャラクターのフィギュアが絞首刑に処され、微風に揺れていたのだった。

【問題編4】 駆り立てるは謎と伝承、横たわるは人形と猫

私と春水が図書委員の仕事を終えてホーミングの十分ほど前に教室に戻ると、

「ねえねえ、為永さん御子柴さん」

それまで同じグループの子を三人ほど自分の机の周りにはべらせて、賑やかに立ち話をしていたクラスメイトの秋川菜莉花まじかさんが、獲物を見つけた狩人のような面持ちでこちらに近付くと芝居がかった小声で話しかけてきた。

「今朝の事件、第一発見者だったんでしょ？」

あれからまだ一時間くらいしか経ってないのだが。恐るべし、秋川情報網。

「いや、正確には最初に見つけたんはウチらやのうて真奈美先生なんやけど」

私の方に向けて仄ほかに苦笑いを浮かべた春水が、少し餌を撒いてみると、

「へへえ、真奈美先生が最初だったんだ」

目の端ですくい上げるような視線を春水に向けた秋川さんは、微速度撮影でも見ているかのような鮮やかさでそれまで辛うじて押し隠していた好奇心を露にして話に食い付いてきた。

「うん。ウチとマコちゃんと遊が登校しとって、校門の前で一緒になったんよ。で、先生が駐輪場にチャリ置きに行った時何や様子が変やったからウチらが駆け付けたら……あないなことになってたちゅう訳」

「そうだったんだ、それは災難だったね」

口ではそう言いつつ、彼女の顔はまた一つ新たな情報を入手した喜びに彩られていた。

「駐輪場の入口に生える木にさく、オタクの人たちが集めるアニメだかゲームだかの女の子のフィギュアが首吊られてたんでしょ。」

何かキシヨいよね」

秋川さんはアイブローで糸のように細く仕上げた栗色の眉をひそめる。その恐怖より軽蔑が全面に出た口調から察して、《キシヨい》という述語に掛かっているのは美少女フィギュアを集める《オタクの人たち》と解釈しても一向に差し支えなさそうだった。

やっぱり彼女とは住む世界が違うな　てゆゝかオタクなのを公言している春水に対してその言い方は、悪意がないとはいえ少々無神経な気がする。

「ところでさ、その木に吊られてたフィギュアって何のアニメのかわ永さん知ってる？」

多分、矢沢あいくらいしか読まなそうな秋川さんは何の気なしにそう訊いただけだったろう。

が、その問いに水を得た魚のように俄然瞳をキラキラ輝かせた春水は自分の鼻先にピンと右手の人差指を立てて、

「チツチツチツ、愚問やな茉莉花ちゃん」
メトロノームよろしく左右に揺らした。

「あないメジャー作品ウチが知らん訳ないやん。あのキャラは孫策伯符言つて、もう三期も続いとる超人気作品・一騎当　」

えゝと春水さん、一応パチンコにもなったりしてますけど、メジャーなのはそのスジの人たちの間だけだと思いますよ。私はツッコんだ、当然心の中でだが。

秋川さんの表情がみるみるうちに辟易へきえきの二文字に染め上げられていくのに比例して、春水の語りは熱を増していく。

「　で、キャラデは二期目からりんしんさんに変更になったんですよ。この人は元々アダルトアニメ方面で活躍しotta人で　」

何でオタクって自分の得意ジャンルを語る時だけは口角泡を飛ばすような早口になるんだろうか。私は春水からそつと距離を取った。

「　で、この作品を語る上で絶対外せへんのは爆乳とパンチラやねん。あまりに過激なもんやから地上波放送やと規制が　」

女性に対してそのプレゼンは根本的に間違つてると思うのだが。

「よ、よっぽどそのアニメ好きなのね為永さん……」

秋川さんは引き攣くわった笑顔でコメントした。

「うん。三期目はA T Xで来月から規制なしで先行放送始まるから今から期待しまくりやねん あっ、ウチ二期までならDVD揃えとるからよかったら明日にでも貸そっか？」

「う、ううん。アニメとかあんま興味ないし……」

秋川さんはぎこちなく首を横に振ると、元いた自分の机に退散していった。

「あれ、わざと？」

昼休み、私と春水と遊は春の麗うららかな陽当たりが快い校舎中庭のベンチに腰掛けてランチタイムを満喫していた。

「半分マジ。うーん、秋川さんをニュータイプに進化させよう思うたんやけど」

それまで飲んでいた牛乳のブリックパックをストローで一気に吸い込んでくしゃくしゃにした春水は、私の問いにそう答えてパックを二メートルほど先の、緑色の塗料が禿げかけた鉄製のクズ籠くずかごにシユートした。

「秋川さん的には余計なお世話以外の何ものでもないと思うけど……人をにん見て法を説け、って言葉知ってるかしら」

クズ籠くずかごに綺麗な放物線を描いて収まるパックを目で追いながら、私は今日何度目かのため息をついた。

「私はてつきり、秋川さんを追い払うためにああいう演技をしたものだとばかり思ってたわ」

「えー、少しお姫様タイプなどこあるけどそない悪い子やないで茉莉花ちゃん」

「いやに肩持つわね」

俯いた私は、足元に転がっていた小石を中庭の真ん中の池を囲む茂みの方に蹴飛ばして、

「そういえばさ、為永最近秋川のグループによく声掛けられてない？」

おにぎりを頬張っていた遊が、指に付いた米粒を口に運びながら会話に加わってきた。

「うん、こないだカラオケ行かへんって誘われたことあった。同人誌の入稿間近やったから断ったけど」

「きつと自分のグループに取り込もうとしてるのよ」

くしゃり、と食べ終わった購買のサンドイッチの包みを掌の中で潰した私は春水の方を顎でしゃくった。

「こいつって見てくれだけは極上じゃない。秋川さんたちって他の高校の男子と合コンしまくってるみたいだから、客寄せパンダに使おうとしてるのよどうせ」

「客寄せパンダって……相変わらず毒舌だね、御子柴は」

遊が言った。

「ほつといてよ」

すると、いきなり私の前にちよこんとかがんだ春水が上目遣いで私を見た。

「な、何よ」

「マコちゃん、もしかして妬いてるん？」

「バカ言わないで、別に妬いてなんかないわよっ」

頬を膨らませた私は、内心ドギマギしながらプイと視線を逸らした。

「御子柴って絶対束縛するタイプだよな」

遊が口を挟んだ。うるさいうるさいうるさいっ。

「そ、そんなことより今朝の件よ」

私は半ば強引に話を変えることにした。実際、午前中はあの出来事がずつと心の奥底で澱おひのように気に掛かっていて、授業にも身が

入らなかったのだ。

「あれ、一体誰がどんな目的でやったのかしら」

「さあ、どっかの変質者の仕業じゃないかな」

遊は平静を保った口ぶりで肩を竦めたが、その顔にはわずかな陰りがにじみ出ている。先々週の、遊にとつて苦い結末を迎えた事件が脳裏をよぎったのだろう。そう察した私はその微妙な変化に気付かないふりをして、

「あれさ、やっぱり理事長に何かの恨みを持つ人間の犯行なんじゃないの」

と、同じく素知らぬ表情を決め込んでいる春水の方に話の矛先を向けてみた。

「作品アンチまたは中の人アンチの仕業かも知れへんで。ほら、実際ネット上で時たまおるやん。漫画の単行本切り裂いたりゲームのディスク割ったりした画像をアップする奴」

春水が言った。

「あるある、それでブログ炎上したりとか。ま、確かに春水の言うことにも一理あるけどさ」

しかし、学校の敷地内に侵入してフィギュアを吊るすのとそれとの間には犯罪か否かという決定的な違いがあると思う。普通のアンチだったら、巨大匿名掲示板のアンチスレに書き込むか本スレに突撃するかで満足するのではないだろうか。

「単なる変質者やアンチのの仕業にしてはちよつち手が込み過ぎじゃないかな。やっぱ《あれ》の見立てと考えた方がタイムミング的に自然よ。もしかしたら今度の総選挙絡みの理事長への嫌がらせかも」

私が下唇を親指と人差指の間でつまみながらあれこれ思案を巡らせていると、

「ちよ、御子柴」

すっかり困惑した顔の遊が話に割って入った。

「それに為永も、あたしを置いて勝手に話を進めんなよ。何でいき

なり理事長が出てくんだよ？」

「あ、ごめん。もしかして遊は今月の《図書だより》読んでないの？」

《図書だより》というのは図書委員会で年に四回発行している冊子で、編集の仕事をしていた真奈美先生の熱心な指導もあって、図書委員による新着本の紹介・真奈美先生の書評・文芸部の短編小説・漫画研究部のイラスト などの記事で構成された、大手サークルのオフセット本のように本格的な出来になっている。毎回四百部は刷るのだが、手に取ってくれる生徒が多くて大体一週間で完売になる。

「あたしがんなモン読む訳ないだろ」

「そうよね」

「即答かよおい、あたしが脳筋バカみたいじゃんか」

私の端的なコメントに遊が口を尖らせて抗議したその時、にゃあ、という世にも可愛らしい鳴き声がベンチの下から響いた。

「あつ、ロイエンタール」

それまでと打って変わって相好を崩した遊が、ベンチの下を覗くと同時に一匹の白い子猫が顔を出した。

「ごめんごめん、今からご飯あげに行くトコだったけど待ちきれなかった？」

陽だまりに照らされて宝石のように光り輝く金目銀目を、眩しそうに細めたその雄の子猫　ロイエンタールは再度、にゃあ、と短く鳴いて返事した。

「あははは、そんなにお腹空いたか。はい今日のお昼ご飯だよ」
子猫の前にしゃがんだ遊が制服のスカートのポケットから猫缶を出しプルトップを引いて地面に置くと、子猫はまっしぐらに缶の中身に飛び付いた。

《彼》は一ヶ月ほど前に学校に迷い込んできた捨て猫で、外見に似合わず（当人に面と向かって言うところでは殴られるが）動物好きな遊が毎日のように面倒を見ている。ちなみにロイエンタールと名

付けたのは、当然遊ではなく春水である。由来など知る由もない遊だが、響きがカッコいいということで即採用と相なった。

「ごつつう食べとるな」

心配そうな顔で春水が子猫を見下ろす。確かに、最初に初めて見た時に比べて毛色の艶がだいぶ悪くなっている気がする。きつと、遊が餌をあげる以外には満足に食事も摂れてないんだろ。私は胸が圧し潰されそうな不安に駆り立てられるがままに、

「ごめんね、本当はウチで飼ってあげたいんだけど」

と、思わず遊に一言謝らずにはいられなかった。

「あたしに謝んなよ、耀一さんがアレルギー持ちじゃ仕方ないだろ」どこかで聞いたような設定だが、兄貴は猫好きなのに猫アレルギーというとても不憫な体質の持ち主なのである。あ、ちなみにウチは謎ジヤム作ったりはしないので念のため。

「それに本来ならあたしが家に連れて帰って面倒見るべきなんだ。でも、ウチは既にわんこがいるし……」

「ウチもマンション住まいやから猫は御法度やし」

遊の言葉を引き取った春水が、がっくり肩を落として嘆息した。

「そういえばさ、この子の飼い主探しは順調？」

三人で嘆いてばかりいても始まらないので、私は場を支配する暗い雰囲気くもりを払拭はらいつするため遊に水を向けてみた。

すると、彼女は少し明るい表情に戻って、

「うん、部活の後輩の知り合いに猫飼いたって子がいるんだ。ロイエンタールの写メ送ってみたら、その子は一発でOKしてくれたけど当然家族の了解りょうかいが要るから……今日明日には返答こたへもらえらと思
う」

「きつとその子の御家族もOKするわよ」

何の根拠もないのだが、私はそう断言して遊を励ますことにした。「だって、ロイエンタールこんなに可愛いじゃない」

「うん、サンキュ御子柴」

遊は少し照れたのか、視線を外して微笑みながら鼻の頭をしきり

に人差指の爪先で掻いている。

「あゝっ、マコちゃんウチだけやのうて遊ともフラグ立てとる」
目を見開いた春水が唐突にオクターブ高い声でこんなことをのたまう、てゆゝかフラグとか言うな。

「ホント、あんたつて余計な一言で場の雰囲気壊すの好きよね」
私が露骨な呆れ顔を春水に向けると、ロイエンタールも私の言葉に全面的に賛同したのか、にゃあ、と鳴き声を上げたのだった。

授業が終わり、まっすぐ帰宅して溜まっていた家事を全部片付けて、リビングでNHKの七時のニュースを漫然と見ながら水槽の中の魚のように寛いでいると、

「ただいま〜」

ライトグレーの背広の上着を肩に引つ掛けて、兄貴が珍しく早く帰ってきた。

「お帰り、お風呂沸いてるけど先入る？」

「いや、一杯やるから後でいい　おっ、今日は豪勢に鰻井ですか」
「うん、スーパーで国産のが特売だったから。ど〜せ今日は暑いから呑むだろうと思って、浜松の叔母さんから教わった《うざく》作ってみた。きゅうりも特売だったからさ」

「ほう、なかなか旨そうに出来てるじゃないか」

「我ながら会心の作ね」

私が胸を反らすと、冷蔵庫から出した麦茶をグラスに注いでいた兄貴がいきなり強い視線を向けて、

「用件を訊こう……」

あ、やっぱバレたか。

「そりゃ、普段なら『何かつまみ作ってくれ』って俺が頼んでも『

面倒くさい、指でもしゃぶってる』ってレスポンスしか寄越さないお前が、今日に限って酒の肴さかなまで準備してるってことは何らかの下心がある。んなことくらい、よほどのバカでもない限り自明の理さ」

随分な言い方に繊細な私のガラスのハートはいささか傷付いたので、

「ふ〜ん、さすが腕っこきの公安刑事」

そう切り返して、兄貴の現在のポジションを強調することですさやかな逆襲を試みた。

「その言い方はよせ」

解いたネクタイをテーブルの上にぞんざいに放り、口をへの字に曲げて不機嫌な表情になる兄貴。元来、殺人事件を専門に扱っ捜査一課への配属を望んでいた兄貴としては、たとえ昇進を約束されたエリートコースとはいえ、庁舎の上のフロアで人事権を握ってふんぞり返っている人たちの《配慮》で宛てがわれた警備部公安課という現在の己のポジションには、内心ふんまん相当憤懣やる方ない思いを鬱積させているはずである。

「ごめん」

予想以上に慚然ざんぜんとしたので素直に詫びを入れる。あまり機嫌を損ねて相談に乗ってもらえなくなったら元も子もない。

「済まないと思うなら、お詫びの印にビールもう一本付けてくれな
いか」

途端に狡猾じょうかくな表情を浮かべた兄貴が和解案を提示してきた。兄貴の機嫌を直してスムーズに相談に乗ってもらうにはやはりそれしかないか。

「だが断る」

調子に乗るなっつゝの。

「ふ〜ん、そりゃ春水ちゃんと遊ちゃんと浦先生はとんだ災難だったな」

「冷凍庫で冷やしたジョッキに注いだビールの最後の一滴を呑み干し、ぷは〜と盛大に息を吐き出しながら兄貴が言った。てゆ〜か私も気遣えよ、一応。」

「で、学校側の事後処理はどうなったんだ？」

「うん、私と春水は真奈美先生から取り敢えず図書館の鍵を預かって図書委員の仕事に戻ったから直接現場は見てないんだけど」

「吊るされていたフィギュアとロープは、住み込みで勤務しているまだ若い用務員の熊谷さんくまがいが処分してくれたらしい。先生は当然他の先生方に事件の報告を上げ、それを受けて開かれた職員会議の結果、次に同じようなことが学校の敷地内で起きたら直ちに警察に被害届を出す方針で一致したという。当然校内には箝かんこう口令が布しかれ、私たちも真奈美先生からくれぐれも他の生徒には口外しないよう念を押されたが、多分明日には秋川ネットワークを通じて他校にも噂が広がっているに違いない。」

「まあ学校側としては妥当な判断だろう　ところでお前、まだ話

してないことがあるんじゃないのか」

「よく分かったわね」

相変わらず鋭い、さすがは警察官。

「元来慎重なお前がこの一件を理事長への嫌がらせと断定するのは、昨日迎えに行った車の中で俺が話した総選挙絡みのゴタゴタ以外にも相応の判断材料があるからなんだろう。違うか？」

兄貴の論理的な指摘に首を縦に振った私は、

「ちよつと待つてて、その判断材料持つてくる」

と一旦二階に上がり、自分の部屋から一冊の小冊子を手にして戻ってきた。

「これ読んだら判るわ」

今月発行の《図書だより》を差し出すと、受け取った兄貴はふ〜んと言いながらページをめくって、

「 皆さんこんにちは、図書委員きつての才媛（笑）御子柴麻琴です。今回私が皆さんにオススメする新着図書は、電撃文庫『生徒会の一掃』」

くおら、バカ兄貴。

「三ページ目、理事長特別寄稿のところ」

私はダースどころかグロス単位の棘とげを付けた口調で、そのページをめくるよう促したのだった。

昔々戦国の頃、鯉沼家は有力な国人領主として桂谷かじいたにすなわち今の白陽市一帯を治めていた。

上洛した織田信長が天下を制しつつあった天正年間、桂谷千五百貫を治めていたのは明兼あきかねという男だった。この男は武勇に優れる一方で、領民からは厳しく年貢を取り立てて毎晩酒宴にうつつを抜き、諫める家臣は片っ端から手討ちにしてしまうという典型的な暴君だった。また好色な明兼は領内を回っては百姓の女房や娘を手籠めにしたので、桂谷では明兼が来るとなると慌てて女たちを家の中に隠す始末だった。

さて、京から戦乱を逃れて桂谷に住み着いていた人形師の親子がいたのだが、娘の方は鄙ひなにはまれな器量よしと評判だった。

その評判をどこからか聞き付けた明兼、人形師に娘を側室として差し出すように命じてきた。領主の命令に逆らえるはずもなく、人形師は泣く泣く一人娘を明兼に差し出したのだった。

しかし、その娘には既に心に決めた許婚いいなすけがいた。館に連れ込まれたその夜、娘は許婚への操を守るため簪かんざしで喉を突いて自らの命を絶つたのである。

犬猫のような扱いで館から突き返された娘の遺骸を目の当たりにした人形師の哀しみはいかばかりのものであつたらうか 数日後、人形師は鬼のような形相で館の前に立ち、明兼に呪いの言葉を吐き

始めた。

その言葉を聞いて怒り心頭に達した明兼がおつとり刀で館から出てくると、明兼を血走った目で睨んだその人形師は、

人でなしめ、いずれ悪行の報いがあるぞ。これがうめの惨めな末路じゃ。

一体の人形を明兼に向けて投げ付けると、隠し持っていた小刀で自害して果てたのだった。

投げ付けられた人形に明兼は仰天した。それは人形師が呪いを込めて作った、死装束に身を包んで腹に刀を突き立てている、明兼に瓜二つの顔をした人形だったのだ。

その後、それまで毛利家に従っていた明兼は中国地方を経略しつつあった織田方に寝返ろうとしたものの、それを毛利勢に察知されて館を攻められた。長年の悪政で領民や家臣の人心が離れていた明兼に与力する者は全くおらず、館は一日で落城。毛利勢に捕らえられた明兼は菩提寺で切腹して果てた。

そう、それは人形師が呪いを込めて作ったあの人形のような最期だったという。

「その後、没落した鯉沼一族は帰農してただけど……江戸時代の中頃、篤農家の傍ら陽明学者としても声望の高かった理事長の十何代だか前の先祖が、時の藩主の知己を得て士分に取り立てられ、新たに開設された藩校の総奉行役に抜擢されたって訳」

「そして学校法人経倫館の経営者として現代に至る、か。ふん、随

分詳しいじゃないか」

空のジョッキに未練がましそうな視線を送りながら、兄貴が小鼻を鳴らす。

「あれから図書館でちよつと調べたのよ」

「つまり、フィギュアを絞首刑にした犯人は、その鯉沼家の伝承に見立てて犯行に及んだってことだな」

「でも、こんなことをする意味がさっぱり判らないわ。順当に考えれば、例の選挙絡みでの理事長への嫌がらせが目的なんだろうけど」

しかし、だとしたら理事長個人の醜聞を怪文書にしたためて周囲にバラまく等の手段の方が一般的だろうし、わざわざ校内に不法侵入してフィギュアを木に吊るすのに比べて、さほど手間もかからないはずだ。

「ま、宮原センセの陣営にとって理事長は不倶戴天の仇敵だろうが、選挙に負けた腹いせでそこまでするとは考えにくいわな。それにだ、パズルのピースが全然足りてない現段階で、犯人像や犯行目的を特定するのはいささか早計じゃないか」

「それもそうね」

もつともな指摘に頷いた私は、

「じゃ、この話は一旦お終いにしてご飯にしましょ」

立ち上がってキッチンに向かい、二人分のご飯と味噌汁をよそう。

「え、俺はまだご飯って気分じゃないんだが」

兄貴はいたく不服そうな顔を尖らせたが、

「二杯目はなしよ。将来、だらしのないビールっ腹の身内は持ちたくないの私」

と、ぴしゃりと言い置いて中くらいに盛った茶碗をその鼻先に突き出した。

「ちえっ、麻琴のケチ」

子供かあんたは。

兄貴はその後もぶつくさ言いながらご飯を口に運んでいたが、ハ

夕と箸を休めて子細ありげな顔付きでこちらを見やった。

「……なあ、お前の話を聞いて思い出したミステリがあるんだが」
「何よ」

「高木彬光の『人形はなぜ殺される』」

横溝正史の金田一耕助、江戸川乱歩の明智小五郎と並ぶ三大名探偵の一人、神津恭介を生んだ推理小説界の巨匠の代表作である。人形がギロチンで首を斬られたり列車に轢断されたりするのと全く同じ手段で、旧華族の令嬢たちが次々と惨殺されていく　という、いわゆる《見立て殺人》もので本格マニアの間でも評価が高く、私も含めてだが高木彬光の最高傑作に挙げる人も多い。

「やだ、怖いと言わないでよ。明日学校行ったら、同じ場所に今度は人間の死体がぶら下がってるなんて嫌過ぎるわ」

ぞっとしない想像に、私の背筋を微かな悪寒が伝った。

「済まん済まん。ただ、脅かすような言い方だが……この一件、これで終わりとは俺には思えないんだよ」

「それって警察官の勘ってやつ？」

「のようなもの、だ。とにかく、新しく動きがあったら教えてくれ。俺の専門外の事件だが、所轄にはだいぶ貸しがあるから多少の便宜を図ってやるくらいは出来る」

兄貴は随分と政治的な臭いをする物言いをしたが、その言葉に一番屈託した思いを抱いているのは兄貴自身だろうから、

「うん、ありがと」

私はそれに頓着していない風を装って、素直に礼を言った。

明日は久しぶりの非番なので録りためたアニメを明け方まで観まくる、という兄貴を階下に残し、明日も朝イチで図書委員の当番の私は、早々に風呂に入って二階の自室に引き上げた。

ベッドに腰掛けてドライヤーで念入りに洗い髪を乾かしていると、

本棚の上の充電機に繋いでいた携帯のメール着信音が鳴った。

《ロイエンター、後輩から明日引き取るって連絡あった》

メールは私の他に春水にも宛てられていた。

いかにも彼女らしい素っ気ない文面だが、私は容易く彼女の喜びと一抹の寂しさを脳裏に思い浮かべることが出来た。ロイエンターにようやく安住の地が見つかったのは喜ばしいことだが、もうあの子に会えなくなるのはそれほど猫好きでない私もいささか寂しいが、それを文面にするのも何だか水を差すようで妙に躊躇われたので、結局は《よかったね》と当たり障りのないことだけを打って返信した。

その後、デスクトップを立ち上げて一時間ほどゲームを進めていたがどうにも身が入らず、個別ルートに入る手前でセーブして電源を落とした。

ぶ〜ん、と短い唸りを残してブラックアウトするモニターに映った私の顔は、魂をどこかに置き忘れてきたかのように虚ろだった。その虚ろな顔に向かって、さつきからずっと私の頭の裏側に、アミーバのように伸縮しながらこびり付いていたものを言葉にして吐き出す。

「フィギュアはなぜ殺される、か」

当然答えはない。ひとくさりため息をついてベッドに大の字になると、すぐに眠気が全身を真綿のように優しく包み込んだ。

私はこの時、自分が口にした命題にいかに悩まされることになるか、その重要性についていささかも予見してはいなかった。

翌日の朝も春水が迎えに来て、昨日と同じダイヤのバスに乗った。車内中ほどの五人掛けの座席に、並んで腰を下ろす。

「ロイエンタール、やっと引き取り先見つかったんやね」

春水はそう言っただけを浮かべた。

「これで一安心ね。あゝあ、兄貴の奴が猫アレルギーでなきゃ絶対ウチにお持ち帰りいしたのになあ」

「ウチかてペットOKなマンション住んどったら、好きなだけもふしたんやけど。うゝん、これが俗に言う逃した魚は大きいってヤツやね」

「……突っ込まないわよ」

バスが《宮前三丁目》に停まったが、乗り込んできた人たちの中に遊の姿は見当たらなかった。きつと一、二本早いダイヤで行ったのだらう。

学校に着いてすぐ、クラブ棟の裏手の方に野球部の生徒たちが三々五々物見高そうな様子で向かっていくのが目に入った。駐輪場の方だ。と思つた途端、嫌な予感が急速に胸元までせり上がってきた。

「まさか……」

横目で春水を見ると、彼女も険しい顔付きをしていた。

駐輪場に向かうと、部活の朝練で早く登校してきた運動部の生徒たちで人だかりが出来ていて、事務職員や先生方がピリピリした表情でバリケードを張っていた。……何、あれ？ ちょゝ気持ち悪い……どつの変質者がやつたんだらうな……あれ、最近ここに居着いてた子だよな？……こらあ、みんな少し下がちなさいっ……理事長に早く連絡を……緊張をはらんだざわめきが何重にも交錯している。

そして、その人だかりの中心は果たして 昨日フィギュアが吊るされていた榎の木だった。

「……御子柴、為永」

背後からかすれた声がした。振り向くと、クラブ棟のライトグリ

インの壁に力なくもたれたジャージ姿の遊が、絶望に塗り固められた表情でこちらを見ていた。泣き腫らしたのが、目が酷く充血している。

「ロイエンタールが……」

遊の傍らに寄り添っていた男子生徒　遊と同じ部活で彼氏の鈴^す木修太君^{ずきしゅうた}が、放心した顔でそう言いさして、口を薄く開いたまま視線を地面に落とし、メデューサに睨まれたように動かなくなった。

握った掌の内側に嫌な汗がじくじくと滲むのを感じながら、私は榎の枝先にぶら下がっているものを凝視した。が、あまりに無残な光景に十秒と見ていられず、唇を引き絞って目を閉じた。

「酷い……」

木に吊るされていたのは今度はフィギュアではなく、冷たいオブジェと化したロイエンタールだった。

【問題編5】その少女、悲嘆（前書き）

作者からの警告　以下、本文中で前作『フランス人の手紙の冒険』の真犯人に言及している箇所があります。未読の方はくれぐれも御注意下さい。

【問題編5】その少女、悲嘆

慌ただしい足音が遠くから聞こえてきた。

見ると、カーキ色の作業服をまとった用務員の熊谷さんくまがいだった。

熊谷さんは兄貴と変わらないくらいの年格好だから随分若い。校内で擦れ違う生徒にもいつもにこやかに声をかけている気さくな人だが、今はさすがにその角張った顔から人の良さそうな笑みは雲散霧消し、狼狽ろうばいの色がそれに取って代わっている。

熊谷さんに先導されて、白衣姿の大宝寺先生が駆け付けてきた。

人だかりを手で軽く散らしながら、ロイエンタールが吊るされた榎の木の下に立った先生は、彫りの深い苦み走った顔を更に苦くして、「こりゃ酷いな、一体どこのどいつがこんな真似を」

吐き捨てるように呟くと、微かに漂う死臭へきえきに辟易へきえきしたのか口元をハンカチで押さえた。

「とにかく下ろしてやりましょう、いつまでもこのままにしといたり可哀想だ」

熊谷さんは脇に抱えていた脚立を地面に立てて天板上上がると、ロイエンタールを吊るしているロープの枝先に結ばれた縄目をほどき始めた。

「なあ、洋雄君……この子猫って、ひと月くらい前からウチに居着いてたヤツだよな」

先生は熊谷さんにそう尋ねながら、軍手をした手でロイエンタールの亡骸を受け取って、その首に巻き付けられていたロープを外す。「ええ、その綾瀬さんがいつも面倒見てました」

熊谷さんが、クラブ棟の壁際にいる私たちを手で示した。

「そうか……」

ロイエンタールを地面に横たえ、スマートな顎に手を当ててしばし考え込んでいた先生は、不意に私たちの方を見やって、

「ちょっといいか」

と、こちらに近付いてきた。

「君たち昨日の昼休みもこの猫に餌をやってたろう、校舎の中庭で」
「見てはったんですか、先生」

春水が言った。

「うん、僕もあの時間は池の錦鯉に餌をやるもんでね。そしたら、あそこのベンチに並んで腰掛けて楽しそうにおしゃべりしながら、子猫に餌をやってる君たち三人の姿が目に入ったという訳さ」

「いえ、私たちは遊に付き合っただけで、この子の……ロイエンタールの面倒をいつも見てたのは遊でした」

私が言い添えると、先生は軽く頷いた。

「うん、それは僕も知ってる。綾瀬君がこの子猫に餌をやっているのは校内で何度も見ているからね。で、それを踏まえて訊きたいんだが」

先生は一瞬冴えた視線を遊に走らせたが、性急のあまり自分の口ぶりがつい鋭くなってしまったのを自覚したのか、不意に口を閉ざすと、

「こんなことをした人間に何か心当たりはあるかね？」

数秒の沈黙を挟んで、最前より幾分か和らいだ語調で尋ねてきた。

「……いえ、ありません」

くすん、と鼻を鳴らして遊が答える。

短い吐息を漏らした先生は、次いで私と春水にも目でそつと探りを入れたが、私たちの表情から犯人に心当たりにないことをすぐさま読み取り、

「そうか。いや、下らんことを訊いて悪かったね」

と、ロマンスグレーの頭を下げて詫びた。

「これどうしましょう？」

しゃがんでロイエンタールの亡骸を黒いビニール袋に入れていた熊谷さんが、立ち上がってこちらに近付きながら先生に尋ねたが、すぐに遊の存在に気付いてバツの悪そうな顔で、

「……やっぱ、焼却炉で燃した方がいいですかね」

先ほどより遠慮がちに伺いを立てると、遊の方に同情的な視線を送った。

「そうだなあ、僕の一存では何とも言えんな。まずは生活指導の首藤先生に訊いてみることに」

「……先生、お願いがあるんですが」

突然、遊が思いついたように口を開いた。彼女の眼差しの奥に潜む強い決意を読み取ったのか、

「ん、何だね」

引き締まった表情で応じる先生。

その表情に多少気後れしたのか、遊の瞳に逡巡の色がありありと浮かび上がったが、彼女は口元を真一文字に結び直して迷いを払拭すると、

「ロイエンタール、墓を作って埋めてあげたいんですけど駄目でしょうか」

改めて真摯な口調で訊いた。

先生は一瞬困ったような顔を見ると、地面に視線を落としてしばらく考え込んでいたが、やがて決心したように面を上げて、

「洋雄君。昔、体育でライン引きに使ってた消石灰ってまだ残ってるよな」

「ええ、体育館倉庫の奥に二袋くらいありますよ」

熊谷さんが頷いた。

「じゃ、消毒にはそれを使えばいいか。どうせ今、ライン引きに使ってるのは炭酸カルシウムだから無用の長物だしな。埋葬は校舎裏の方なら別に構わんと思うが、一応僕の方で首藤先生や校長先生には了解を取っておくから、放課後に生物準備室まで顔を出してくれないか。それまで《彼》は実験用の冷蔵庫にでも安置しておくよ」

「……ありがとうございます」

先生の言葉に安堵の表情を浮かべた遊が深々と一礼したので、私たちもそれに倣って頭を下げた。

横目で遊の様子を窺うと、彼女が頭を下げている辺りのアスファルトの地面に、大粒の涙が次々と吸い込まれていくのがはつきりと見えた。血の気が失せた彼女の唇から、何度目かの嗚咽が漏れだす。「遊……」

喉の奥が詰まるような感覚がして、それ以上彼女にかけるべき言葉を見いだせなかった私は、不規則に上下するその肩におずおずと手を添えるしかなかった。

一時限目は首藤先生の現国だったが、急遽自習になった。先生は生活指導主任だから、きつと今頃は校長や教頭と額を突き合わせて、今朝の事件の善後策でも話し合っているのだろう。

自習とはいいい条、教室内は休み時間とさほど変わらない喧騒に満ちてはいたが、いつもと違ってどこことなくよそよそしい感が拭えなかった。わずか一時間で噂が校内を巡り巡って、皆ある程度ロイエントールの事件のことを知っているのだろう。見ると、通路側の一番前の席の秋山さんが遊の様子をまるで新米のスパイのように何度もチラチラ窺いながら、同じグループの娘たちと声を潜めて何やら話していた。

結局、昨日兄貴が言った通りになっちゃったな。

窓際の自分の席で兄貴に事件発生を知らせるメールを打ちながら、私は一際大きなため息をついた。人間の死体が吊るされるよりはマシかも知れないが、ロイエントールに少なからず情が移っていた私にとっては、今回の事件はある意味それ以上の衝撃を与える出来事だった。

私でさえそうなのだから、遊の受けた驚き、怒り、悲しみは到底言葉には尽くせないものだろう。そんな悲嘆のベールに覆われた彼女を目の当たりにして、私の頭の中は真っ白になってしまい何も言えなかった。遊が偽善的な安っぽい同情を何より嫌う質たちなのは、これまでの付き合いでよく判ってはいるのだが……。

こういう時、兄貴だったらきつとごく自然体に慰めの言葉をかけてやれるに違いない。そう思うと、自分が途轍もなく惨めで情けない存在に思えてくる。

再度ため息をついて打ち終わったメールを送信すると、

「スドセンの授業やったら即ボツシユートされるところやで、携帯」

隣の、本来の住人が秋山さんのところに行つて空いた席に座っていた春水が、「没収じゃけえのお」と首藤先生の口真似をしてニヤニヤ笑いかけてきたが、その明るい表情の裏側に陰りが貼り付いているのは否めない。

「結局、理事長が『図書便り』に書いた話通りになつてもうたな」
真面目な表情に戻つて、春水が言った。

「こういうの、マコちゃんの好きな推理小説で何ていうんやつたっけ？」

「……《見立て殺人》よ」

ロイエンタールを殺した犯人が、鯉沼家の伝承を意識して犯行に及んだことは間違いなかった。その目的はストレートに考えると理事長への嫌がらせということになり、そう仮定すると理事長を恨んでいるであろう宮原前代議士サイドの人間に動機が発生するのだが
昨日兄貴も指摘していた通り、単に選挙絡みでここまでする必要があるのかという疑問点が残る。

「あるいは、犯人はウチらがそない思つのを計算しとるかも知れへんで」

宮原サイドの人間が犯人であるかのように思わせて、自分を容疑者候補から外させる。なるほど、その方がミステリ的な考え方では

ある。

しかし、どちらにしてもロイエンタールを殺す必然性が判らない。悲しいことに世の中には、憂さ晴らししないしは快樂を得るために無抵抗の動物を殺す人間も存在するが、今回の事件の犯人はそういった手合いとは根本的に異なる気がする。犯人の一見異常な行動の裏には、何らかの冷徹な計算に基づく合理的な理由が隠されているのかも知れない。 厳密な論理の裏付けなど全然ない、単なる直感に過ぎないが。

「……御子柴、為永」

私たちを呼ぶ声があった。顔を上げると、わずかの間にすっかり生気が抜けてしまった様子の遊が所在なげに立っていた。彼女は何か不可視の強い力に扼やぐされているかのように喉元をひくつかせ、数秒の躊躇いの後に焦点の合わない濁った眼差しをこちらに向けた。

「勝手な頼みでごめんだけど、お願いが」

「放課後生物室まで付き合ってほしい、でしょ？」

遊が言い淀んだのを引き取って、私は穏やかに言葉を接いだ。

一瞬、遊のがっしりした筋肉質な肩が小さく波打つ。泣き腫らした目を大きく見開いていた遊は、ややあつて遠慮がちに首を縦に振った。

喉元で小さくため息をついて、私は机の上で両手を組みながら言った。

「こないだのストーカー事件の時もそうだったけど…… 実際問題、遊は私たちに対しても他人行儀過ぎるのよ。私たちもう長い付き合いなんだし、そんな友達甲斐のない人間じゃないつもりなんだけどな」

「うん、マコちゃんの言う通りや。遊はもっともつとウチらに甘えて頼ってもらっても全然構へんねんで」

春水も身をぐいと乗り出して言い添える。

「……二人とも、ありがとな」

頬をふつと緩ませ、照れくさいのかぶつきらぼつな口調で礼を言

う遊。その黒曜石のような瞳の奥に、白いものがわずかに光っていた。

放課後、私たちは旧校舎一階に位置する生物準備室に向かった。

新校舎を出て、青いトタンの屋根付きの通路を進む。左手に見えるモスグリーン色のネット越しのグラウンドでは、運動部が「ファイオー、ファイオー」と声を張り上げて一生懸命青春の汗を流していた。とまあ他人行儀な表現なのは、私自身が運動音痴で完全にインドア派ゆえなのだが。

グラウンドの新旧両校舎に面する以外の三方は、こんもりと繁る樹木に囲繞いこりょうされており、吹き込んでくる穏やかな風が私の鼻先に爽やかな新緑の香りを届けた。

「そついえばさ、鈴木君は？」

遊の彼氏の姿がないのを見咎めて、私は小首を傾げた。彼の為人からすると少々腑に落ちない。

「……あいつは会計の用事で生徒会。どうしても外せないみたい」
言葉少なに答える、遊。どこか含みのある言い方だった。

「ふっん」

軽く頷いて視線を前に戻した私だったが、不意に遊がそんな言い方をした理由に思い当たった。以前会計を担当していた、部活のマネージャーの河野あかりの代理。

「彼女、結局あれから来てへんのやろ。学校」

春水がぼつりと呟く。そのブラウンの瞳の底には、わずかな陰が

あつた。

「うん、一応うちに謝罪しには来たけどさ……あれからすぐ、お母さんが部活に退部届を出して。学校には全然来てない」

「さもありません、と思つた。彼女が自分の犯した行為を本当に深く反省しているかどうかは神のみぞ知るだが、どちらにせよ遊と顔を合わせることは神経が堪えられないのは理解出来る。」

「私は偽善者ではないので、自分の身内も道具に使う卑劣な手段で親友を陥れようとした彼女に向ける同情の念は、一切持ち合わせてはいない。が、彼女の親御さんの苦悩やあの一家の暗い未来を想像すると、胸が万力で締め付けられるようにキリキリ痛むのもまた事実だった。」

「……それはあの一家で何とかするしかない問題やな」

「自分自身に言い聞かせるような口調でそう言つた春水は、耳たぶに手をやって面映ゆそうに続けた。」

「利いた風な言い方やけど　自分の負つた傷は結局は他人やのうて自分自身でしか癒せへん、ウチはそう思つんや」

「私と遊は互いの視線を結び合わせ、こくと頷いたのだった。」

「生物室は旧校舎に入つて右手の突き当たり、体育館の向かい側にある。入口の周りに据えられた収納棚の中には、ラベルが褪色したホルマリン漬けの魚やら爬虫類やらの標本がところ狭しと並べられており、いつ見ても気色悪いことおびただしい。」

「すぐ隣の準備室のドアを先頭に立っていた遊がノックすると、」

「はい」

「室内で大宝寺先生の応じる声があつた。」

「ああ、綾瀬君だね。入りたまえ」

「失礼しますと口々に言つて、私たちは準備室に入った。」

「準備室の中はコーヒーマシンの匂いが立ちこめており、老眼鏡を掛けた先生が綺麗に整理されたデスクの上で、市松模様のマグカップ片手に何やらプリントを仕分けていた。作業を中断して老眼鏡を外した先生は、両肩を揉みながらデスクチェアをこちらの方にくるりと向

けて、

「あの件だがね、校長からOKが出たよ」

「……ありがとうございます」

嬉しさの中に一抹の悲しみが潜んだ複雑な表情で、遊が四十五度の角度で深々と頭を下げる。私たちもそれに倣った。

「本来なら僕が付き添ってあげたいんだが、残念ながら明日から郷里^{なか}で母親の法事があるんで早退^ひさせにやなんのだよ。で、昼のうちには熊谷君に手配をお願いしといたから彼に声をかけてくれないかな。今時分は体育館の周りの植木の手入れをしてるはずだから」

「法事、ちゆうことは明日の四限は自習ですかっ？」

「為永君、そんな露骨に嬉しそうな顔するんじゃない」

苦笑いを浮かべた先生は、デスクの上のプリントを手で示した。

「自習用のプリントは準備おさおさ怠りなく作ってあるから、お生憎様だが教室でバカ騒ぎしとる暇はないぞ」

「ちえっ」

唇を尖らせた春水は後ろ手を組んで右足で虚空を蹴り上げる。何だその、昭和時代の悪ガキみたいなりアクション。

新聞紙に包まれて安置されていたロイエンタールを受け取り、生物準備室を辞して体育館の方に向かうと、果たして白いハンドタオルを頭に巻いて高枝鋏を手にした熊谷さんが、体育教官室の窓辺に植わったキンモクセイの剪定作業に精を出していた。

私たちの姿を認めた熊谷さんは、高枝鋏を芝生に置いて額に光る汗をタオルで拭いながら、

「ああ、待ってたよ」

と、快活な様子でこちらに歩を進めてきた。

「準備はさつき済ませてる。さ、行こうか」

熊谷さんに案内されたのはグラウンド南端の、背の高い雑草が傍

若無人に生い茂っている場所だった。夏休み前の一大イベントである大掃除の際には、炎天下での雑草抜きという名の強制労働をさせられる魔のスポット。去年夏の大掃除では 各クラスが清掃する担当区域は美化委員会で行われる抽選で割り振られるのだが、それまで大過なく美化委員を務めていた娘が見事《魔のスポット》を引き当ててしまい、不憫にもクラス中の大ブーイングを浴びたことがある。

「必要なものはこの上に置いてあるから」

熊谷さんが指し示した鉄錆びたリアカーの上に、口の開いた大きな茶色い紙袋とスコップが何本かと軍手の束が置かれていた。

「野良犬が掘り返したりするといけないから、穴は最低でも一メートルは掘ってくれないかな。で、伝染病や土壌汚染の予防のためにその袋に入ってる消石灰を全部、猫をよくに掛けてほしいんだ。こうしないと異臭が漏れ出して近隣に迷惑が掛かることになるから、くれぐれもよろしく頼むよ」

大宝寺先生からよほど言い含められているのだろうか、熊谷さんはやや神経質な口調だった。

「はい、判りました。色々ありがとうございます」

遊がきびきびした口調で応じると、熊谷さんは少し安心したのか、「じゃ俺はさっきの場所で仕事に戻るから、終わったらそこまでリアカーを持ってきてくれないかな。片付けるのはこっちでやるから」そう言っつて背を向けると数メートル進んだところで振り返り、「くれぐれもよろしく頼むよ」と念押しして立ち去っていった。

一旦教室に戻ってジャージに着替えた私たちは、軍手をして雑草を引っっこ抜き、スコップで作業を開始する。放課後、花も恥じらう女子高生が三人で黙々と墓穴を掘る 傍目から見たら何ともシュールな構図だろう。

「……禁じられた遊び、ってあったわね」

重苦しい沈黙を破って、私は言った。第二次大戦のフランス、ナチスドイツの侵攻で両親を亡くして南部に疎開してきた戦災孤児の

少女が見つけた新しい遊びは、疎開先の家の少年と一緒に動物の墓を作ることだった。というストーリーである。頭の中に流れる、ナルシソ・イエペスの哀愁に満ちたギターの響き。

「日本の子役ってこまっしやくくれた感じがしちゃうんだけどさ、洋画の。特にヨーロッパの芸術映画の子役って全然そんな感じがしないのは、一体何でだろうな」

黒土にスコップを突き入れて、遊が応じる。彼女は基本的には昔の邦画マニアなのだが、それ以外の作品も全然観ない訳ではないのだ。

「あれは不思議よね」

とりとめもない雑談をしているうちに、穴の深さは胸の辺りに達していた。

「あゝ、手エ痛なつてもうた」

軍手を外した手をぶるんぶるんと振る、春水。私も身体のおちこちの筋肉に乳酸がたまっている。

「二人とも引きこもって気持ち悪い萌えアニメばっか観てるから、運動不足なんだよ。そんなんじゃ足腰弱って、将来すぐ寝たきりになっちゃうぞ」

遊が白い歯を見せて、ニヤリと笑った。

「ふん、運動バカの遊なんかと比べないでほしいわ」

鼻を鳴らして私が言い返すと、

「何だと。言っただな御子柴、この頭でつかちの蘊蓄女うんちくっ」

と、声を荒らげた遊に頭をちよんと小突かれた。

一瞬の間があつて、私たちは一斉に肩を揺らして笑った。ややもすると滅入る気分を誤魔化すために。いつしか笑い声が乾いた吐息に変わるまで。

沈鬱な表情に戻った遊が、包んでいた新聞紙からロイエンタールを出す。目を背けたくなるのをこらえて至近で遺骸の状態を観察すると、後頭部が陥没して赤黒く凝固した血がこびりついていた。どうやら犯人は鈍器でロイエンタールを一撃して死に至らしめたらし

い。ぐしゃっ、という頭蓋骨の碎ける嫌らしい音を想像して背筋が寒くなった。

墓穴の中にロイエンタールをそつと横たえ、袋に一分目ほど入っていた消石灰を掛けていると不意に、まるで洋画の埋葬シーンみたいだな

アッシュユトウアッシュユトウダスト という馬鹿らしい考えが浮かんできた。

灰は灰に、塵は塵に、と頭の片隅で暗然と呟いていると、春水が住宅街に面したフェンスにしゃがんでいた。見ると、辺り一面に咲いているアカツメクサの花を摘んでいる。

「何してるの」

「子供の頃よう作ってたやん、花の冠。供えたげよ思ってた」

私と遊は顔を見合わせて微笑みを交わし、童心に帰った気分で春水の作業に加わる。二十分ほど費やし、直径十センチほどの冠が三つ出来た。石灰の敷き詰められた墓穴に冠を投げ入れ、ロイエンタールの冥福を祈りながら黒土を掛けていく。

土饅頭が出来上がった時、防災無線の五時のチャイムが鳴った。

【問題編6】殺人形考察

体育館の方に戻ってリアカーを熊谷さんに返し、クラブ棟の前で部活に少し顔を出すと、という遊と別れた。

教室でジャージを脱いで制服に着替え、春水と連れ立って下校した。校門の周りに植わった高い木の上から、機械のモーター音を思わせる低い虫の音が降り注いできた。頬を優しく撫でていた風が不意にやみ、湿気が身体にまとわり付いてくる。

私の携帯が着信音を鳴らした。兄貴からのメールだった。

急で悪いが、よんどころない事情で東京に出張するんで一週間ほど留守にする。事件の方は春水ちゃんと二人で対処されたし。よろしくメカドック。

兄貴よ、ネタがベタな上に古い。

「ウチ的には『ヨロシク・トウモロ』やな」

「てゆゝか、あんたはナチュラルに人の携帯覗いてんじゃないわよ」それはともかく、一応は警察に籍を置いている兄貴の情報網に頼れないのはかなりの痛手である。

「ったく、肝心な時に使えないわね兄貴は」

盛大に舌打ちした私がふと、校門の県道を挟んだ向かい側のコンビニに視線をやると、鄙ひなには稀な白塗りのベンツが、周囲を睨み付けるように傲然と停まっているのに気付いた。中に人はいない。

「うわっ、あれ絶対ヤーさんに一万ギル」

春水が小声で決め付ける。

「ベンツに乗ってるからヤクザだなんて、典型的なステレオタイプだわ」

私が半ば諭すように言った時、コンビニの自動ドアが開いて一人の四十がらみの男性が出てきた。

中肉中背、金色に染めた髪をポマードでこつてり固めてオールバックにしている。趣味の悪い青紫色のスーツをまとい、その下の臍^へ脂色の柄シャツのだらんと開いた襟元には、金のネックレスが西日を受けて光っていた。南米のヤドクガエルよろしくあからさまな警戒色で、どう好意的に解釈してもまっとうな社会人には見受けられなかった。

金髪男は携帯片手に口汚い感じでぺちやくちや喋りながら、だらしのないガニ股歩きで件の白塗りベンツに乗り込み、乱暴に車をスタートさせていった。

「マコちゃん、ドンマイ」

八重歯を覗かせてニヤニヤと笑う春水。む、ム力つくなあ。

咳払いをして気を取り直し、私は言った。

「……それはそうと、春水、奢ってあげるから少し時間あるかしら」

県道沿い、学校から十分ほど市街地方面に歩いたところに《パティシエ・トマ》という行きつけのケーキ屋さんがある。

この店のオーナーパティシエは父とは古くからの知り合いらしく、フランスの老舗での修行から戻ったオーナーがこの地で独立した際、父が開業資金の大半を無利子で融資したらしい。オーナーはそのことをよほど徳としているらしく、父が亡くなって五年経った今でもクリスマスには毎年、豪華絢爛な特大ケーキを律儀にも届けてくれる。

都心の有名店と比べても遜色のない本格的な味、と県内では結構評判の店なので、五時半を過ぎた今現在は大半が売り切れてしまい、それ以外の商品も二、三個しか残っていない状態だった。

春水は腕組みして唸りながら、シヨーケースの中で宝石のように光り輝いているケーキを、真剣な眼差しで矯めつ眇めつして、

「決めたっ、クラシック・シヨコラとルバーブのタルト」

人の奢りだと思つて二個も頼みやがりますか、こいつは。夕飯前なのに。

「別腹別腹、マコちゃんはやっぱいつもの?」

「当然じゃない」

品切れになつてなきやいいが、と内心穏やかならざる気分である、と、

「ワンパターンやな、どんだけ好きやねん」

半ば呆れ顔で春水が茶化してくる。

「黙れ小僧」

美味しいんだから仕方ない。ショーケースに立っているマシユマ口のような頬の女性店員に「ミルフィーユありますか?」と訊くと、彼女はにっこりと花のように微笑んで、

「はい、ございますよ」

よかつた。私は胸を撫で下ろした。

ケーキと飲み物を注文した後、売り場の横に併設されているイトインの窓際のカウンター席に並んで腰掛け、最近読んだ小説について漫然と語らいながら十分ほど待っていると、先ほどの女性店員が銀色の盆にケーキと飲み物を乗せてやって来た。

飲み物は二人とも紅茶。メリオールという、筒状のガラスに金属の弁がついた可愛い容器で淹れられている。本来は紅茶ではなくエスプレッソを淹れるのに使つらしいが、このカラクリめいた容器で出された紅茶は非日常的な心躍る雰囲気にして、私は結構好きだつたりする。メリオールの容量はカップ二杯分で、これで二百五十円はお得である。

この店のミルフィーユはオーナーのスペシャリテで、パイ生地がクリームで湿気ないうちに食べてほしいという意向で、イトイン限定になっている。形を崩さないよう慎重に魅惑の長方形にナイフを入れると、パリパリという小気味のいい音が響く。そして一口頬張ると、上顎に刺さりそうなほど香ばしく焼けたパイ生地の芳醇なバター香り、間に挟まつた滑らかなカスタードクリームの優しい

バニラの香り、クリームの甘さを引き締めるほのかな洋酒の香り

これらが渾然一体となって、私の舌の上でふんわりと花開いた。

「いつ食べても最高ね」

思わず目を閉じて陶然としていると、横からひょいと身を乗り出した春水が、

「男との初デートの時は頼むの厳禁やけどな、ミルフィーユ。今度のテストに出るから覚えときつ、マコちゃん」

「……それは彼氏のいない私に対する嫌味のつもりかしら、春水」

私はゆっくり吐き出した言葉の端々に怒りを滲ませたが、彼女は全く頓着する風もなく、

「それはちゃうで。マコちゃんの秘めた魅力は所詮、世の凡俗な男どもには判らへんちゆうことや。判つとるのはこのウチだけで充分」

小悪魔めいたコケティッシュな微笑を浮かべると、突然すらりとした形のよい人差指を伸ばして私の右側の口角に触れた。ややあつて頬をついっとなぞって人差指が肌から離れると、その先には淡黄色のカスタードクリームが少し付いていた。

「うん、ホンマ美味しい」

人差指をぺろつと舐めて、上目遣いでこちらを見る春水。

「何すんのよ、この変態っ」

自覚する以上に内心動揺したのか、語尾が震えてやや威勢に欠ける悪罵を投げ付けた私は、春水から慌てて視線を外し、カウンターに置かれた紙ナプキンで改めて口元を拭った。

「犯人は間違いなく、ミステリの《見立て殺人》を意識してると思うの」

ミルフィーユを全部胃の中に収めた私は、二杯目の紅茶をティーカップに注いでミルクを落としながら、本題を切り出した。

「それってアレやる、マザーグースやら手毬唄やらの歌詞になぞらえて人が殺されたりするつちゅうヤツ」

春水の言葉に私は頷いて、

「そうね。世界で一番最初に見立て殺人を扱った作品はアメリカの推理作家ヴァン・ダインの『僧正殺人事件』で、マザーグースの歌詞になぞらえて次々と殺人が起こるとい話ね。で、それに触発されてアガサ・クリステイが書いた作品が『そして誰もいなくなった』で、これもマザーグースの歌詞を題材にしているわ。もっとも、この作品はいわゆる《クローズドサークル》ものの祖として捉えるべきかもだけど。」

我が国では、大横溝が『僧正殺人事件』に感銘を受けて戦後まもない時期に書いたかの『獄門島』が、『見立て殺人』ものの嚆矢しやうしやといっているわね。これは、俳句に見立てられて瀬戸内の島の網元の三人姉妹が殺されるという話なんだけど、童謡殺人にこだわった大横溝は俳句を使った見立てに満足してなかったらしかったの。でも、我が国にはマザーグースみたく殺人の見立てに使えるような童謡はない。だったら、自分で作ればいいじゃない。ってことで書かれたのが『悪魔の手毬唄』って訳」

我が県は鬼首村おにくびという架空の村に伝わる古い手毬唄になぞらえて、村の有力者の娘が次々に殺されるという話で、個人的には大横溝で一番好きな作品である。

「あと、ある一定の法則に基づいて行われる殺人も、大きい意味での《見立て殺人》に含めてもいいんじゃないかしら。」

これの古典的な作品は、Aで始まる地名のA・A、Bで始まる地名のB・Bといった具合に、住んでいる場所と名前と苗字の頭文字が同じという以外は何の共通項もない被害者たちが、アルファベツ

ト順に殺されていき、現場には当時のイギリスの時刻表『ABC鉄道案内』が置かれている。というクリステイの『ABC殺人事件』で、大横溝もこれを元ネタにして、村の中で並立する人物のうち一方が次々に殺される『八つ墓村』を書いているわ」

まあこの作品の場合、以前松竹で渥美清主演で映画化された際に、キャッチコピーに使われて流行語にもなった『あたりじゃ〜』という言葉が示す通り、世間一般的には『落武者の祟り』という、おどろおどろしい土俗的なイメージで浸透してしまっているのが実情だ

が。

「似たような趣向では、本格の鬼こと鮎川哲也の『りら荘事件』も外せないところね。これは最初の死体のそばに意味ありげにトランプのスペードのAが添えられ、次の死体にはスペードの2が」という話よ」

「なるほど、『見立て殺人』にも色々あるもんやね」

相づちを打った春水が、ブラウンの眼をこちらに向けて光らせた。「でも、それぞれ『見立て』を行う理由は違ってくるんやろ」

「そうね。これは全くの個人的な見解だけど、『見立て殺人』は実行理由ごとに六つに大別することが出来ると思うの。隠蔽、錯誤、伝言、快楽、思想、偶然。もちろん、一つの事件で以上に挙げたカテゴリのうち複数の理由を兼ね備えているケースもあるわ」

区切りのいいところで一息ついて、白地に青い花柄のティーカップを口に運ぶ。喋り通して渴いた喉を冷めた紅茶が潤していった。空いたカップをソーサーに戻し、椅子の上の足を組み替えながら話を再開する。

「第一の『隠蔽』は、現場に重大な手がかりを残してしまったのを隠すため、または、何らかのトリックを実行する上で必要な状況をカモフラージュするために見立てを行うケースね。これらの場合、見立ての装飾自体に事件解決のヒントが隠されている場合が多いわ。見立てでそれっぽい動機をわざと提示して真の動機を隠すのも、これに含めていいかしら。」

第二の《錯誤》は、童謡の一番、二番の順に見立てて殺されたように見せかけて実は二番の方が先に殺されていたり、単独犯に思わせて実は複数犯ないしは便乗犯だったり、人間心理を逆手に取った罠が主になるわね。

第三の《伝言》は、見立て自体が特定の人間に対する警告や告発等、何らかのメッセージになっていくケースね。これは被害者に対しての場合の他に、共犯者に対しての場合。例えば、複数犯で犯人一人につきターゲットを一人ずつ殺すよう取り決め、その実行を促すために見立て殺人を行う例も存在するわ。

第四の《快楽》は、いわゆる劇場型犯罪。探偵役や捜査当局に対する挑戦や、単なるゲーム感覚で行う見立て殺人ね。だから、見立てそれ自体は大した意味を持たない場合が多いわ。

第五の《思想》は、犯人の狂った思想や歪んだ信仰によって引き起こされる見立て殺人で、一例を挙げると、コチコチのキリスト教原理主義者で破滅的な終末論に凝り固まった犯人が、聖書のヨハネの黙示録の記述になぞらえて殺人を起こす。といった風なケースね。

第六の《偶然》は、犯人の意図せざる偶発的な状況が重なって、たまたま見立て殺人のようになってしまったというものね。個人的には、バカミスならともかく本格でこういうオチはどうかと思うけど……」

私が一気呵成に話し終えると、それまでツインテールの髪をいじりながら聞いていた春水が、

「で、マコちゃんは今挙げた六つの理由のうち、今回の事件はどれに当てはまると思っとるん？」

と、質問をぶつけてきた。

「うん。まず《快楽》と《思想》と《偶然》の三つは、小説の中ならともかく常識的に考えてまず有り得ないわよね。一番可能性が高いのは朝にも言った通り、衆院の選挙戦に絡んだ理事長への嫌がらせ。戦国時代の伝承に見立てた理由は、理事長への警告即ち《

伝言》と解釈出来るわね　という線なんだけど、だとしたら、わざわざロイエンタールが殺されなくちゃいけない理由が不明瞭だわ」

ふと、私の頭の中に一つの仮説が浮かんできた。

「……ひよっとして、あれを例の戦国時代の伝承の見立てと解釈するのが根本的に間違ってるのかも知れない」

「というと？」

春水が身を乗り出す。

「犯人にとっては吊り下げたフィギュア　《孫策伯符》それ自体に意味があるのかも、ってことよ」

「つまり犯人のアンチ活動っちゅうこと？　せやけど、それってマコちゃんに前に否定しとった説やん」

「ううん。私が言いたいのはそういうことじゃなくって、《孫策伯符》というキャラクターが首を吊るされてるってことが、特定の誰かに宛てた暗号になってるんじゃないか、ってことよ。ほら、三国志だと孫策って　正史と演義で記述に若干の違いはあるけど、どっちも自分が滅ぼした勢力の残党に襲われて、その時の傷が原因で亡くなってる訳だから、それを敢えて史実とは異なる死に方である首吊りにしてるってことには、何らかの重大な意味が込められてるような気がするのよ」

じゃあ具体的にどんな暗号だ　と尋ねられても、判断材料に欠ける現時点では判りかねるが。

春水は腕を組んで中空を見据え、しばらく無言のまま私の言葉を吟味していたが、やがて苦い表情を浮かべてゆっくりと首を横に振った。

「その推論はちょっと勇み足な気がするで。理事長への脅迫っちゅう安易な結論に飛び付きとっない、マコちゃんの気持ちはよう判らんやけど」

「……むっ」

心中を言い当てられた私は、言葉少なに俯くしかなかった。

「タイミング的に考えて、犯人が例の伝承を念頭に置いてロイエンタールを殺したんは間違いないと思う。せやけど、犯行目的は理事長への脅迫なんて単純なモンやないっちゅうマコちゃんの意見には賛成や。それは犯人の用意したフェイクの結論やとウチは思う」

戸外の夕日に照らされて茜色に染め上げられた春水の整った顔に、チエシヤ猫のように捉えどころのない笑みが貼り付いている。

「何かいい考えがありそうね」

「ここはひとまず、犯人の用意した答えに敢えて食い付いてみるんも手かなと」

テーブルに頬杖を突いて、ふふっ、と意味ありげに含み笑う春水。「何が言いたいのよ」

嫌な予感がした。

「マコちゃんの家って理事長の家と親戚なんやろ」

「親戚ってほど近い関係でもないけど……私の曾お祖母様が鯉沼家の出らしいから、まあ遠い姻戚関係ってところかしら」

「ほんなら、明日にでも理事長に選挙絡みのゴタゴタの件で探り入れてみたいから、マコちゃんの顔でちよちよいとアポ取っという〜な」

やっぱり。がっくりと肩を落とした私は、露骨にため息をついた。「一番使いたくない手だけど、兄貴に頼れない以上仕方ないわね」

遊のため そう自分に強く言い聞かせることで、私はややもすると自己嫌悪のスパイラルに陥りそうなその行為に対して、なげなしのモチベーションを辛うじて奮い起こした。

「うん、遊のためや」

自身の言葉の重みを量るようにそう呟いた春水は、夜の帳とほりが下り始めた窓の外に視線を移した。

店内の柔らかい照明を受けて、窓ガラスにくつきりと映し出されたその眼差しは、まるで入念に研ぎ澄まされて青白く光るナイフのような犀利さいりさを帯びていて、同性の私でも思わず魂を奪われてしまっいそうなくらい美しかった。そして、出来ることなら認めたくない

印象だが　ちよつとでも触れたら手が切れてしまいそうなほど冷
やかかで、少しだけ怖かった。

【問題編7】三千世界のフィギュアを殺し

翌日の早朝。

「言われた通り、理事長から面会のアポ取り付けといてやったわよ」

例によって例のごとく私の家に押しかけてきた春水に、眠気を振り払ってベッドから起き上がった私は、挨拶代わりに告げた。

「放課後、四時過ぎなら時間空くつてさ」

昨夜 春水と別れて帰宅した私は、理事長の自宅の番号をアドレス帳で調べてダイヤルした。自分の学校の生徒とはいえ、必要最小限の親戚付き合いしかしていない遠縁の小娘からの急な電話に、理事長はどنگり眼をひん剥いている様子が容易に想像出来るくらい驚いていて、私が話を切り出すまで訃報か何かと勘違いしていた。まあ、電話を掛けた私自身が己の行動にびっくりなのだけけれど。

校内で起きた事件は、選挙絡みのトラブルの可能性があるので少し話を聞かせてほしい という私の用件は、先方にとってはそれに輪を掛けて驚きを与えるものだったろう。当然、理事長は始めのうち是不審の念を隠そうともしなかったが、結局は私の出した兄貴の肩書きという伝家の宝刀の前に、渋々納得というかたちになつた。

狡い手だという自覚はあるが、最も有効な手なので全面的に依存せざるを得ない。兄貴の場合、私と同じような埒わちの明かない状況の打開に用いられる宝刀は、御子柴家の威光ということになるのだから。兄貴の仕事上の心労が多少は判った気がした。

……死にたい。

「さっすがマコちゃん、愛してる！」

「じゃかしいっ」

抱き付いてきた春水にすかさず、内心の苛立ちを思いつきり込めた掌底を見舞うと、たわば、という奇声を撒き散らしてどうと床に

伏した。

登校すると、これまた例によって例のごとくフィギュアが《殺されて》いた。

今度の現場は新校舎の昇降口の前で、四肢をバラバラに切断された大量のフィギュアがうずたかく積み重なっていた。文字通り、死体の山である。

現場の前では生活指導主任の首藤先生が、鬼瓦のような厳つい面相を更に厳つくして、ガヤガヤと詰めかける物見高い生徒たちをドスの利いた声で制止し、かつ他の先生たちに指示を飛ばしていた。

人だかりの中に、肩を寄せている遊と鈴木君を見つけた。私と春水が口々に朝の挨拶をすると、二人は弾かれたようにこちらに向き直り、声を合わせて沈んだ調子の「お早う」を返してきた。

私たち四人は、誰言うもなく喧騒に包まれた人だかりから少し離れる。

「いつから？」

私は遊に尋ねた。

「……あたしが来た時には、もう」

「ストセンが言ってたの聞いたんだけど、最初に見つけたのは熊谷さんらしいよ」

身を硬くしている遊の手を優しく握りながら、そう言い添える鈴木君。

「熊谷さんか……」

と、私はオウム返しに呟いた。

去年の文化祭、クラスで演る芝居の稽古で夜遅くまで居残っていた時、紺色の制服姿の警備員さんを見かけたことから推察するに、うちの学校は夜間宿直を警備会社に委託しているのだろう。警備員さんがどの時間帯に校内を見回るのか、一介の生徒でしかない私は

勿論知りようもないが、犯人がバラバラにしたフィギュアを昇降口に置いたのは、最後の巡回の後と考えるのが自然だろう。後で理事長に確認を取れば、その辺りの状況は詳しく判るはずだ。

「ねえ、御子柴」

細い中にも芯の通った遊の声が、私を思考の海から引き戻した。

「……これってさ、やっぱ予告なのかな」

言葉に詰まった私と春水は互いの顔を見つめ、しばらく困惑の表情を交わし合っていたが、とどのつまり無言で肯定するしかなかった。

「また、ロイエンタールみたいに何の罪もない仔が殺されるのかな。何だって犯人はこんな酷いことを……」

と、口元をぎゅっと引き絞った遊の黒目がちの瞳には、瞋恚の炎がありありと映し出されていた。小刻みに震えるその肩は、部活で鍛えられてがっしりしているにもかかわらず、この時ばかりは繊細なガラス細工のように脆くはかなげな印象を私に与えた。

鈴木君が遊の両肩を掌で包みながら、救いを求めるような熱っぽい視線を向けてきた。私と春水が、遊を悩ませていたストーカー事件を解決した実績。実際は春水の推理に負うところが大きいことを踏まえてのことだろう。しかし、目下兄貴の力に頼れない私には、彼の期待に応えられる自信のストックが五割ほどしかなく、それとなく地面に目をやって視線の圧力から逃れた。

「大丈夫や遊、きつとウチらが何とかしたる」

私とは対照的に春水がたわわな胸を叩いて請け合う。どこから湧き出てくるんだか、その自信は。

私がため息交じりに肩を竦めた、その時 真奈美先生が職員用昇降口の方から出てきた。先生はこちらを一瞥した後、白いハイヒールのかかとをアレグロの速さでアスファルトの地面に打ち付けながら、首藤先生の元に駆け寄っていった。

「先生、理事長に連絡取れました。また通報して構わないとのことです」

「ああ、判りました浦先生」

洪面で頷いた首藤先生は、褐色のジャケットの内ポケットから携帯と名刺を取り出し、名刺に書かれているらしい番号をダイヤルする。昨日の事件は学校側が警察に既に連絡してるはずだから、名刺はさしずめその際事情聴取に訪れた所轄の係官のものだろう、と私は思った。

ふと、私の視界の真正面に見覚えのある、軽くウェーブがかつた茶髪のセミロングが映った。クラスメイトの秋川茉莉花さんである。彼女は警察に電話をしている首藤先生の目を盗んで、携帯の写メで現場の写真を撮るといって、市民ジャーナリズム的活動に精励していた。

「野次馬根性もここまでくると、ジオン十字勲章ものやな」

「まったくね」

しばらく春水と顔を見合わせて微苦笑を交わしていたが、突然ハタと思い当たった。警察が来る前に私も現場写真を撮つとかなきゃ！

首藤先生はまだ警察と電話の最中で、分厚い唇をへの字に曲げてしきりに先方の話に頷いている。制服から取り出した携帯を手の甲で隠しながら現場に向け、人垣の間を縫って何枚か写メを撮る。幸いシャッター音は現場の喧騒にかき消され、先生の耳には届かないようだった。

秋山さんと目が合う。彼女には、普段は借りてきた猫のようにおとなしい私がこんなことをしているのがよほど意外だったらしく、一瞬鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしていたが、やがて露骨に共犯者めいた薄ら笑いをこちらに寄越してきた。

やれやれ……私は内心呆れつつ、唇の端ににじみ出た皮肉げな表情を噛み殺したのだった。

六限の数学が終わり、放課後になった。

教室から一斉に吐き出された生徒たちが部活に出たり、バイト先に直行したり、帰路に就いたりと銘々の行き先に向かう中、私と春水と遊は校内の自販機で買った缶ジュースを手に、新校舎の中庭にあるベンチに並んで腰掛け、理事長と面会を約束した四時まで時間を潰すことにした。

「秋姫すもも、巖島貴子、朝倉音夢、フィーナ・ファム・アーシユライト、涼宮ハルヒ、長門有希、朝比奈みくる、坂上智代、リシアンサス、百瀬玉、セイバー、キュアブラック、神岸あかり」

携帯の写メを確認しながら呪文のように呟いていると、

「何だそりゃ」

私の顔をひよいと覗き込んだ遊が、まるで耳慣れない異国の言葉を聞いた風に、凜々しい眉を大仰にひそめた。

「バラバラにされたフィギュアの全キャラクター名」

私は言った。警察が現場に来る前に私が撮った写メに加えて、適当な口実を設けて秋山さんの携帯から転送してもらったデータを、春水と二人で休み時間をフルに使って分析したのだ。

「ふ〜ん」

「……可哀想な人を見るような目はやめてもらえるかしら、遊」

「で、何か判ったのか？」

「残念ながら何も判らないことが判っただけ」

アフォーリズムめいた言い方をして、私は俯き加減にため息をついた。

「いや、ウチはそうは思わへんけどな」

春水がいやに自信たっぷりな様子で口を挟んできた。

「どづいこと？」

「十三体のフィギュアのうち五体、つまり約三分の一は同じ原画師がキャラクターデザインしてるやん。その他のキャラクターはバラバラやけど」

「……単なる偶然よ、有為な意味があるとは思えないわ」

私は春水の言を即座に切り捨てた。

もしかして、キャラクターの名前の一番最初の文字を並べ替えると何らかの意味のあるアナグラムになってたり　と一旦は思ったりもしたが、十三文字もあると意味のある文字列がパツとは思いつかばない上、推理する私の方で恣意的な解釈が無限に出来そうなので、暗号という方向性からのアプローチはすぐさま放棄した。

「　あたし、この事件の犯人は絶対許せない」

ベンチの正面の池に無機質な視線を向けた遊が、低い声で独りこちるように呟いた。

「ロイエンタールには……何の罪もないあの仔には、これから幸せな生活が待っていたはずなのに、その未来を一瞬で残酷に断ち切った犯人が、あたしは心の底から憎い。もし許されるものなら、自分の拳の骨が砕けるまで殴り付けて殺してやりたいって思ってる」

手にした炭酸飲料の空缶がくしゃり、と潰れる。

私たちはその物騒極まりない物言いをたしなめることはしなかったし、また別段する気も起こらなかった。私も　そして恐らくは春水も、遊と同じ状況下に置かれたら同じことを思うに違いないから。

「けど、あたしにはその憎むべき犯人を見つけ出すことなんて到底出来やしない。陸上しか取り柄のないバカだからさ、あたしって」

ひとしきり自嘲めいた笑みを浮かべていた遊は、気持ちを切り替えるように、背筋を伸ばしてすうっと深呼吸すると、

「だから二人とも頼む、ロイエンタールを殺した犯人を見つけろよ」

左右に座る私と春水に、熱っばさを内包した真摯な眼差しを等分に結んできた　今朝、事件現場で鈴木君が向けてきたのと同種の

視線を。私は胃が重くなるのを感じたが、その視線から逃れるのは今度は許されないことだった。

内心に渦巻く不安を押し殺して、私は無言で視線に応えた。

理事長室は旧校舎一階の職員用昇降口のそばにある。生徒や教職員の往来がほとんどない、ひっそりと静まり返った場所である

私がドアをノックして来意を告げると、中から「入りなさい」と声がした。

「失礼します」

初めて立ち入る場所に、内心少し緊張ながらドアを開ける。一歩足を踏み入れると、上履きの底に学校には似つかわしくないペルシヤ絨毯のふかふかした感触が伝わった。

十二畳ほどの広さのさほど日当たりのよくない室内は、年季の入った見るからに高価そうな調度品に囲まれており、先祖代々から学内の最高権力者の地位を継承した人物の根城には相応しいといえた。右手の大きな本棚には教育関係の分厚い本に交ざって、浦先生の話では大学で英文学を専攻したという理事長個人の蔵書とおぼしき、洋書のペーパーバックが何冊か見受けられた。

チャコールグレーのダブルの背広を着た部屋の主は、奥の窓際に据えられた光沢のあるマホガニー製の執務机で、何十部と積まれた書類を指サックでぺらぺらめくりつつリズムカルに決裁印を押して、その横では事務員の熊谷さんが、棚にずらりと並べられたトロフィーを丁寧な磨いていた。

書類の束からおもむろに顔を上げた鯉沼理事長は、肉付きのよい

腕に巻いている金色の時計に視線をやつて、「もうそんな時間かと呟くと、

「待たせてしまつて済まんが、この仕事だけ先に片付けてしまいたいんで、そこに腰掛けてちよつと待つてくれんかね」

先日、即売会帰りに乗換駅のホームで会つた時とは打つて変わつて鷹揚な物腰で左側の応接セットを指し示し、再び書類の束に向き直つた。

三人並んで、本革張りのソファーにおずおずと腰を下ろす。

身体に掛かる負荷を全て吸収してくれるようなその座り心地は、まさしく快適の二文字に尽きたが、理事長室という、ただでさえ一介の生徒風情にはベルリンの壁並みに敷居の高い場所で、黙々と理事長の仕事ぶりを眺めるしかないという氣ぶつせいな状況が大いにマイナスして、総合的な座り心地は歯医者者の待合室の長椅子と大差なかつた。

遊は早くも倦んだ表情で、お尻を落ち着きなくもぞもぞ動かしている。

テーブルに視線を落とした春水が、鼻の頭に皺を寄せた。見るとテーブルの上に置かれたガラスの灰皿に吸い殻が残っていた。春水は煙草の臭いが大の苦手なのである。

すると、熊谷さんがやおらテーブルに腕を伸ばして灰皿を掴み、吸い殻をゴミ箱に捨てると柵の上に退けてくれた。角張つた精悍な顔付きによらず、細かいところまでよく氣が回る人らしい。

ちよつとどころではなく、たつぷり五分ほど待たされた。

ようやく仕事を片付けた理事長は、熊谷さんにお茶を淹れるよう頼むと、私たちの向かいのソファーに腰を下ろして、

「 耀一君の差し金、とかではないんだね」

と、こちらの肚の底を探るような湿っぽい視線を向けてきた。ただの小娘である私に対するにはいささか神経質な態度だが、それだけ選挙に絡んで色々な方面からの風当たりがあるのだろう。

「はい」

理事長に視線を被せて、私は強く頷いた。

「昨夕の電話でもお話しした通り、この件は私たち個人で動いてるので兄はほとんど関与してないです。それに、妹の私が言うのも何ですが……兄は上昇志向とは無縁の人間で、政治的には中立のスタンスを保っていることは、理事長も多少は御存知と思いますけど」
言外に、私は宮原陣営のスパイではありませんよ、という意を込める。

「確かに……いや、詮ないことを言って済まなかった」

バツの悪そうな顔でそう言っ、私に禿頭を下げる理事長。どうやら警戒はある程度解いてもらえたようだ。

「校内で立て続けに起きてる不審な事件は、麻琴君の考えとる通り、私個人への嫌がらせとみてまず間違いないだろう」

モスグリーンのネクタイの結び目をいじりながら、理事長は重々しい口調で話を切り出す。

「本当ですか？」

「ああ、最近私に宛ててこんな手紙が届いとるからな」

苦虫を噛み潰したような顔でソファから立ち上がると、執務機の抽斗から数通の茶封筒を取り出し、私たちに寄越した。

私はそのうちの一通を手にとり、中の便箋を開いた。

兵役は国民の神聖な義務である。これは、コミュニスト共の陰謀で戦後民主主義なる左翼思想に毒された我が国を除く、世界中のすべからく国々の常識である。それを公の場で堂々と公言したに過ぎぬ高潔なる憂国の士を、背後からの裏切りで苦境におちいらせた、曲学阿世の徒にして反日勢力の手先である貴君には、いずれ大東亜戦争で散華した幾百万の英霊に成り代わって必ずや天誅が下されるであらう。

当然だが、差出人の名前や住所は書かれていない。消印を確認すると《西大寺》だった。県庁所在地の東側に位置する地域だ。

文面を精読してみる。一見、いかにも右側の人たちの好みそうな堅い単語を多用した美文調だが、その実、《すべからく》の誤用、《公の場で公言》の重複表現、《成り代わって下される》の辻褃の合わない受動態　小論文テストでは明らかに減点対象になりそうな、文法上の基本的な間違いがちらほらと見受けられる。

差出人はちゃんとした文章を書き慣れてなく、知的レベルも決して高いとはいえない人間で、己にとって口当たりのいい思想を無批判に受け入れて背伸びをしているだけなのだろう、と私は結論付けた。

他の封書も改めてみたが、筆跡が異なるだけでどれもこれも似たり寄つたりの内容で、消印は半分以上が西大寺だった。

五通ほど読んだところで、負のオーラを放つ文字列とのにらめっこにいい加減うんざりした私が、ため息交じりに視線を外すと、熊谷さんが湯呑みを四つ乗せた盆を持って部屋に戻ってきた。熊谷さんはテーブルにお茶を置きながら、私の広げた脅迫状をしげしげと覗き込んでいたが、

「これが理事長が前に仰つた脅迫状ですか……この、《曲学阿世のともがら》ってどういう意味ですか？」

と、興味本位を内包したしかつめらしさで尋ねてきた。

「曲学阿世というのは司馬遷の史記に由来する言葉で、学を曲げて世に阿る、つまり権力者の意向や世論おもねに迎合しようとして、自らの信念を放棄するという意味で……まあ、我々教育者にとっては最も恥ずべき言葉だな」

理事長がいかにも教育者でございといった態度で解説すると、
「はあ」

熊谷さんは不得要領といった顔で、ぼんやり相づちを打った。どうやら《司馬遷の史記》の時点でピンと来てないらしい。見ると、遊も隣で同じような顔をしている。え〜と、漢王朝は先週の世界史でやったばかりなんだけど……。

戦後の復興期、GHQ占領下にあった日本が国際社会に復帰

を果たすべくサンフランシスコ講和会議で締結した平和条約は、米英を中心とする西側陣営との間だけのもので、時の首相・吉田茂ら親米保守派の唱える《単独講和論》に基づいていた。しかし、左翼的思想が言論界の主流を占めていた当時の日本国内では、旧ソ連や中国などの東側陣営も含む全連合国との間で平和条約を締結すべきだ、という《全面講和論》もかなりの勢いを保っていた。全面講和論の中心的存在だった東大総長・南原繁を、吉田首相は「曲学阿世の徒の空論」と批判し、それを受けて南原は「権力的弾圧以外のものでない」と激しく反発した。この衝突は当時の世論を大いに賑わせ、曲学阿世という言葉が人口に膾炙するきっかけにもなっている。

脅迫状の差出人はこの事件を念頭に置いて、理事長をイデオロギ一的に当てこすっているに違いない。私がそう口にする、理事長は驚き顔と呆れ顔が半々で入り交じった複雑な表情をして、「御子柴君、君は高校生なのに何でそんな爺むさいことを知ってるんだね？」

大きなお世話である。私は軽く咳払いして封筒を持ち上げ、消印の日付を確認した。

「一番古い日付は最初に例の悪戯があつた日の数日前……なるほど、判りやすい状況証拠ではありませんね」

「だろっ」

理事長は我が意を得たりとばかりに大きく頷いた。むしろ判りやすす過ぎるくらいだ、と私は心の中で付け足す。

「これは現段階では勝手な憶測に過ぎんから、くれぐれも口外は控えてほしいんだが」

ソファアの上で足を組み替えながら、底意を感じさせる上目遣いでこちらを見る理事長。

「西大寺に本拠を構えとる右翼団体で《一桜会いちおうかい》という、ヤクザとも繋がりのある団体があるんだが、その活動資金の一部が前代議士の親族会社から出ると聞いたことがある」

「つまり、理事長はその《一桜会》とかいう団体が今回の件の首謀

者やと考えとるっちゅう訳ですか？」

春水が水を向けてみると、無着色のソーセージを二つ並べたような理事長の血色の悪い唇に、誤魔化すような笑みがうつすらと浮かんだ。

「そうとまでは言ったらんよ、組織の意を勝手に汲んだ一部の跳ね返りの仕業という可能性も充分にあるしな」

「なるほど、兄に伝えておきます」

「よろしく頼むよ」

理事長の言葉に私は内心苦笑した。先だつては「口外するな」と言っていたくせに。理事長としては、私というメツセンジャーを紹介して兄に今回の事件が一桜会の仕業であることを示唆することで、その背後にいる宮原前代議士への牽制を目論んでいるのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0655i/>

オタク系推理少女 為永春水II フィギュアはなぜ殺される

2010年10月8日14時13分発行